艦隊○れくしょん
悪堕ちイラスト(CG)+ノベル
堕深漸染
-深素改修完了セリ-

――カツ、カツ、カツ……。

金属を叩くヒールの音が、静かに響いている。
高く鳴る踵の音とは裏腹に、足取りは重い。
薄暗い空間は息が詰まりそうなほどに重苦しく、
女性ひとりで歩くのは心細いのだから仕方ない。
かろうじて手に当たるのは温かさとは程遠い、
冷たい金属製の壁、もしくは金網。
「閉じ込められている」と考えて間違いないだろう。
それでも、女性は怯えながらの歩みを止めない。
恐怖は感じる、それでも前に進めるのは――。

彼女が、【艦娘】だからであった。

悪しき力と戦い、打ち倒す力がある。
死地を越え、ここまで生きた経験がある。
止まっているのは、得策ではないと分かっていた。

遠征任務へ向かう途中――信じ難いことだが。
【海中へ引きずり込まれた】のだ。
当該海域は最近、
「突如として連絡が途絶える」
「大きなバケモノのような深海棲艦を見た」
など……不穏な情報が交錯していた。
彼女は何かに脚を掴まれるように海中へと没し、
気が付いたら金属に囲まれていたのだ。
深海棲艦か、それとも別の何某か……。
自分の置かれた状況を知るためには、確実性のある
情報が欲しい。故に、こうして歩いていた。

「……ふぅ……誰も、いない……のね」
海霧に迷い込んだように、ひとり呟く。
不安でため息を吐いた時、その大きな胸も揺れた。
白い靄が現れ始め、本当に霧が出たようだ。
しばらく金網が続き、徐々に明るくなっていく。
進展がありそうで、蒼い服に身を包んだ女性が
少しだけ歩みを速めた。
（何かあるかもしれない――この先に……）

「……っ!!」

何かを見つけたように、灯りへと向かう。長い長い通路の先にあったのは、何かの部屋らしき残骸だった。壁も天上も無残に壊されているが、ヒトらしき活動の痕が見られる。

（ここは、何かの施設だったのかしら……？）

艦娘が独自に感じる重苦しさから、彼女が考えたこと、それは――ここが海底にある空間だということだ。しかし、もしそれが真実だとしたら、深海棲艦の施設だということになる……？

（悩んでいても仕方が無いわ……何か、手掛かりは）

意を決して、何らかの情報を探す。部屋だった痕の散乱は凄まじい、まるで何かが暴れた後のようだった。

艦娘の中でも豊満な身体を動かす度、瑞々しい身体が張り出す。身を包む蒼から浮かび上がる肉体は、閉じ込められていても輝く宝石のようであった。

彼女の名は――。

ムギュッ♥

ムギュッ♥

重巡洋艦・高雄型一番艦――【高雄（たかお）】

艦娘としての実力だけでなく、女性としての魅力も溢れ出しそうな、美しい風貌をしていた。

紅い瞳は凛として絶望とは程遠く、この状況を少しでも打破しようと意気込んでいるのが窺える。

「あら……これは……？」

高雄の心が引き寄せたのか、手掛かりになりそうな冊子のようなモノを見つけた。表紙もボロボロになっているが、かろうじて読める字だ。

「特別処置研究履行施設……特研……？」

どうやら施設名が印字してあるようだが、大きな㊙の印もある以上――極秘事項の内容だろう。

だが、高雄は手に取らずにはいられなかった。

「うう……これは……」

手に取った瞬間に感じた、不快な感情。何の匂いかは分からないが、おそらく気持ちの良いモノではないだろう。こんな閉鎖された空間に長くいてしまえば、どうとも思わなくなってくるのだろうか……高雄は不安な表情を、初めて見せた。

（早く、鎮守府に戻らないと……せめて、連絡手段をどうにか……それに、他の子もいるかもしれない）

藁(わら)にも縋(すが)る思いで、おそるおそる表紙を開く。

記してあったのは、施設の概要から始まる資料。深海棲艦の種類、驚異、その対抗手段が記された、極秘とは程遠い有益な情報だった。

（――やっぱり、ここは海底なのね……）

想像していた通り、施設は海底に造られた施設であった。だが、高雄が読み進める内に、予期せぬ情報が飛び込んで来る。それは、秘密裏に造られた実験施設であることだった――。

「――……っ」

高雄は思わず、言葉を失う。最初の項目からはかけ離れた、おぞましい実験の数々を目の当たりにしてしまったからだ。

勝利するためという大義のために――人間、艦娘、果ては鹵獲した深海棲艦までも、分解したとある。

「勝つためとはいえ、こんなおぞましいことを……」

隔離された極秘施設、そこで行われていたのは非人道的な実験だったのだ。おそらく、この冊子を記していた人物も狂気に苛まれ――。

『……廃棄されたのね、この場所は……』

あまりにもむごい記録に、高雄はしばし呆然としていた。彼女たちが戦っているのは無論、平穏で安全な海を取り戻すこと――だが、これは……。

一刻も早く、この施設――特研を抜け出さなければならない。だが、冊子も後半に差し掛かると、意味の無い羅列が多くなり、通信手段等の記述は見られなかった。覆す、見返すといった類の言葉が目立ち、上層部からも疎まれていたのではないかと、想像に難くない。

「どうにかして、脱出しないと――」

どうやら、外界との接触も絶っていたらしい。そうでなくても、高雄が使える艤装――兵器の類や他にも捕まっている艦娘がいるかもしれない。胸元に手を当てて考えている高雄は、意を決した。

もう、これ以上ここには用が無いだろう。

（でも、どうしてここには灯りが――……？）

突然のことであった。

何か鋭い痛みが、背中から走る。

高雄は何か液体のようなモノが入り込み、それが全身を駆け巡る――染め上げられているような異質な感情を覚えつつ、ビクリと身体を震わせる。

瞬く内に身体に力が入らなくなり、倒れていく。

言葉も無く、ただ意識が失われていった――。

ズザッ

「ん、んん――――……っ……!?」

苦しそうに呻いた高雄は、すぐに置かれた状況に気が付いた。両手は拘束され、まるで施術されるような台座の上に固定されていた。

身体の自由が、利かない――それも、こんな場所でこんな時に。芳しくない状況に、思わず息を呑む。

（スカートが……っ!? よくも、こんな恰好を……）

目線を下に向ければ、高雄のトレードマークでもある短い丈のスカートが取り外されていた。しかしガーター部分だけは残されている――といっても、股間が丸出し、隠すべき部位は全て曝されていることには変わりはない。

ただ赤面することもなく、じっと黙っていた。眼の前に、首謀者たるモノの姿が見えるからだ。

「起きたかね、ようこそ――オレの実験室へ……」

不意に投げ掛けられた声は、男性でも女性でもなく例えるならば機械が喋っているような、無機質な声だった。

「……」

「何とか言いたまえ。貴艦の名は？」

「名乗る名前など……!!」

「オレは少尉だ。命令には従え。所属組織が恋しくないかね？」

「くっ……重巡洋艦……【高雄】です……」

強い光を当てられている。不当な尋問のような状況でも、高雄は決して弱気にはならない。

睨み付けているのは、霧状の黒い塊。紅くギョロつくような眼を剥き出しにした、得体の知れないバケモノだった。

丸腰になった下半身を見て、少しだけ嗤ったような気がして、高雄は虫唾が走る。

それでも質問に答えなければならないのは、従軍しているモノの弱いところか。

「艦娘ひとり、こうまでしないと抑えられませんの」
「生憎、ひとり抑え付けるのもやっとなのでね。この通り肉体が無ければ苦労する――慎みたまえ」
もはや精神体の類か、少尉と名乗った男は完全な異形と化しているようだ。地位だけは誇れるのか、話し方は立場を加味したモノになっているが……。
「そこで、だ――高雄。君には我が秘書艦になってもらう」
「秘書艦、ですって……？」
秘書艦とは、鎮守府の最高権力である提督の補佐をする――つまり、直近の部下だ。
「拒否は出来ん。我が【深素】を取り込み、より多くの艦娘を従わせるための重要な足掛かりとなる役目を――」
（……【深素】……？）

『――馬鹿め、と言って差し上げますわっ!!』
気を吐くような高雄の言葉に、少尉はゆらゆらと異形の身体を震わせて嗤った。
『強く出たな』
『何度でも仰って差し上げますっ!! 貴方には!!
少尉の――軍属の誇りは無いんですかっ!?』
ヒトとして死んでいながら、なお恥を上塗りするという。
高雄の怒りは、何をされても屈しないという、自分自身への鼓舞もあった。
『くふふ……立場は理解している。
少なくとも、私はな――さて、高雄。
今度は君が、自分の立場を理解する番だ』
『何ですって……少尉、貴方は既に――っ』
高雄が言うよりも早く、少尉はスッと動いた……!!

「ひぁッ!!?」

何かが高雄の中で蠢いたかのように、不気味な振動が起こる。身動きの取れないまま身体を震わせ、言いようの無い悪寒を覚えた。

「如何(いかが)かね？　君に打ったのは深素のいわば原型。徐々に浸透していき、今や私の合図ひとつで君はかつてないほどの性感を得ているはずだ」

「最低、ですッ!!　貴方は、最低の……おおおッ!?」

得体の知れない何かを身体に入れられている。高雄の表情は苦しそうに歪み、少尉を睨み付ける。だが、視界も思考も、全てモヤが掛かったようにはっきりしない。あるのは、確かな疼きだけ――。

「う――おおおあぁぁぁぁぁぁッ!!?」
「ほう、まだ抵抗出来るとは、素晴らしい素材だ。やはりオレの秘書艦に相応しいぞ、高雄。捕らえた艦娘どもを手に入れるために、君には特別な力を与えてやろう……ッ!!」
高雄らしからぬ、下品な叫び。少尉の黒い手が、自らの子宮の上から直接……侵入していた。
生きたまま体内を玩ばれるというおぞましさ。高雄の嫌悪感を表すように身体中に黒いヒビが走る。【深素】が艦娘を蝕んでいる証だ。
少尉の手は止まらず、女性として最も秘めたる部分を粘土細工のようにこねくり回される。
「やめてッ!! やめ、ぇぇぇぁッ!!」
「高雄、君を秘書艦として任命する！深素を撒き散らし、そして深素を受け止める器ッ!!オレのために生き、オレのために死ねッ!!」

「んんんんおおおおおおおおおおッ❤
何ッ❤ 何ですのこれえええええッ❤」
深海から地上にまで響き伝うような声。
嬌声が混じった腹の底からの絶叫の理由は、
柔らかい股間から無骨に起立した肉棒。
少尉の手によって引きずり出されたような
男根が、高雄の女性器の上にそびえ立つ。
「くははッ素晴らしいッ!!
艦娘の身でありながら
深素を精製し得る怒張ッ!!」
「怒張……お、オトコのおちんちんが……ッ❤」
「チ○ポだッ!! チ○ポと言えッ!!」
ズゴッ
妖しげな成分が高雄の肉体で成長したかの
ように、塊となって表れたのか――少尉の言葉が
天上からの祝福に聞こえ、歓喜に打ち震える高雄。
肉棒からの淫靡な鼓動に合わせ、禁断の快楽に
ただただ酔う……。

「チ○ポ……チ○ポ……お♥　チ○ポッ♥
チンポッ♥♥　チ○ポッ♥♥　おおおおおッ♥♥♥
チ○ポッ♥　チ○ポでイクううッ♥
イッグううううううううううッ♥♥♥♥♥」
高雄とは思えない、野太い喘ぎ声。
深素という悪魔の物質により身体の
組織を改造され、精神まで汚染された。
黒い液体を力強く肉棒から吐き出し、
絶頂と淫語を撒き散らす彼女に、
自らが出した汚濁が降り注ぐ。
精子のような黒い深素が蠢き、衣服に
まとわり付き始める……。
ビュッ
ビュッ
ビュッ♥
「これは興味深い。高雄、君はこのまま
イキ続けたまえ。次に会う時は、君が
忠実な秘書艦として忠誠を誓い、
相応しい姿になっていると信じている」
吐精機関と化した高雄は、返事も抵抗も
しないまま、数十秒ごとに襲われる快感に射精する。
理性も感情も、矜持も信念も誇りも吐き出すように……。
深海に、淫らな高雄の声が響き続けていた――。

（も、もう……ダメ……❤チ○ポおッ❤チ○ポイキたくないのにいッ❤止まッ❤おッ❤またイくッ❤苦しいのにいッ❤❤ドロドロの真っ黒ザーメンが入って来る❤❤イッてる最中にまたイカされ――ッ❤❤）

もはや、高雄の姿を確認することは出来ない。自分が射精した汚濁に埋もれてなお、射精の勢いが止むことは無い。雄々しい肉棒だけが蠢き、高雄の存在を主張していた。

ドクン……❤

ドクン……❤

（あぁぁ……提督……私、もう戻れない……❤だって、こんなに気持ち良くて、ドロドロに溶けて❤私の身体、深素……になってッ❤ずっとずっと射精して、また――ふ、うふ❤うふふふ……ッ❤❤）

朦朧とする意識の中、浮かんだのは笑みであった。深素に蝕まれた結果、それを施した少尉への感謝と崇拝の念が溢れて来たのだ。深素は素晴らしい、深素こそが唯一、争いを終わらせる術である……。

多幸感に包まれながら、意識が途切れた――。

（私は……この力を使った秘書艦に――ッ❤）

――金網と暗闇の深海施設【特研】には珍しく、まともな一室がある。かつて少尉と呼ばれていた人物……実験の責任を取っていた人物が使っていた部屋である。その椅子に座るように、黒い塊となった異形がいた。

【深素】とは、海を侵略する脅威である深海棲艦から抽出した高エネルギーの核を兵器転用への目的のために加工したモノである。

人知を超え、ほぼ無尽蔵とも言える彼奴（きゃつ）らの動力源部分をむしり取り、人間や人工物に半ば寄生させ、強力な変化を促すのが深素処置である。対抗するために、その力を利用するべく研究していた施設がここ特研なのだ。

人間が深素処置を受けた際は、圧倒的な力の流れに正気を失い、殺し合いを始めるほどだった。少尉は研鑽を重ね、深素を取り込みつつも正気を保ち、施設を改造しながら新しい実験材料を探すという生活を送っている。人間だった頃の姿を失っているが、それは些細なことだった。

深素の存在を認めず、組織ごと抹消した世界への憎悪――無いと言えば虚偽になるが、今はそんなことよりも、より好（よ）い深素を求め研究することの方がよほど大切で重要なことだ。

艦娘を利用した実験はいよいよ大詰めを迎える。深素を得て、手駒となった艦隊を利用し、地上へと浮上する。それが、少尉の目的だった――。

「失礼致します、少尉――♥」
やけに甘ったるい声を出しながら、少尉の部屋に入って来るモノがあった。
豊満な身体を動かす度に、オンナの匂いをこれでもかというほどに振り撒き、主張が止まない。
さらに、股間にはオトコの象徴である肉棒――。
それも、彼女の手首ほどはあるのではないかと思うほどに大きいモノが備え付けられ、誇らしげに振るっている。

深素処置は無事に完了したようだ。あの理知的で優しさに満ちていた表情は妖しく嗤い、性格までもより都合の好いように書き換えられているのだ。
自分の置かれた立場、状況に何の疑問も持たず、与えられた使命を全うし、与えられた深素の力を最大限に利用し、仕えるべき少尉に全てを捧げる。
理想の秘書艦の姿を見て、少尉は促した。
「姿を見せたまえ、秘書艦――高雄……!!」

「はッ❤❤❤　お待たせ致しました――少尉❤
秘書艦高雄、深素処置――無事に完了致しました❤
この高雄、少尉のために秘書艦としてあらゆる手を
尽くしますわ❤　ここに絶対の忠誠を誓い、この身
果てるまでお仕えする次第……どうか、よろしく
お願い申し上げますわ❤」

声も肉体も高雄ではあるが、その精神は深素に
隅々まで侵蝕されていると考えて間違いない。
凛々しかった蒼い服は艶のある光沢素材になり、
肌の露出が眩しい。肉付きの好い重巡洋艦の肉体は
さらに重みを増し、包み込まれそうな豊かさだ。

「ご苦労だった、高雄。君はこれから、秘書艦として
ここ【特研】での業務を行ってもらう。いいかね？」

「当然ですわ、少尉❤　いかな困難な任務でも、
この深素に溢れた肉体を駆使する所存です❤
このチ〇ポと頭脳を使って、艦娘たちを思いのまま
操り、命すら差し出す道具にしてみせます❤❤」

深素処置は、完全に成功しているようだ。
本来の高雄ではあり得ないであろう言葉に、少尉は
満足した。

「よし――では、早速秘書艦に任務を与える」
「はッ❤　何なりとご命令をッ❤❤❤」
少尉が伝えたのは、この施設は海底にこそあるが触手のようなモノを伸ばし、海上のモノを鹵獲可能だということ。高雄もそうして捕まえ、また他にも艦娘を捕らえている――といったことだ。
「この施設はいずれ地へと根差す。そのためには、侵攻出来る力を持ったモノが必要なのだ」
「素晴らしいお考えです、少尉ッ❤❤」

移動出来るようにするための工程を伝え、その間に高雄には戦力となる艦娘に深素処置を進めさせる。優秀な秘書艦を手に入れたからこそ出来る算段だ、当の高雄は瞳を潤ませ、身体をぶるりと震わせた。
「チ○ポ❤　チ○ポを突っ込めるんですねッ❤❤お任せ下さいッ❤　秘書艦高雄、出撃しますッ❤」
行為を想像しているのか、滾る股間を抑え切れず、ガニ股になったまま高雄は部屋を出て行った……。

深海施設には、実験に使用する素体を納めておく小さな部屋――営倉のようなモノがいくつもある。
金網で覆われた施設内部とは違い、強固な深素素材で塗り固められた営倉内部。ここから脱出するのは普通の艦娘たちでは不可能だった。
例えそれが、戦艦であろうとも……。

「やはり、どこにも抜け出す場所はないようだ。私たちはどうやら、囚われの身になっている」

「と、囚われって――そんなぁ……」

落ち着いた女性の声と、恐怖に怯える少女の声が響く。この営倉内には、ふたりの艦娘が捕らえられているらしい。
「しかも、この施設はおそらく深海だ……空気は循環せず、重く圧し掛かって来るような圧を感じる」
「だ、だったら――早く逃げ出さないとっ!?」
「落ち着け。私たちを捕らえているということは、何かしら理由があってのことだろう。簡単には処分しないはずだ」
「そ、それって――どういう意味……です、か……!?」
「分からん。砲弾の的にするか、慰みモノにするか……。それとも鎮守府との交渉道具か……待つしかないな」

営倉内にいるひとり、駆逐艦・暁（あかつき）は、不安を隠せないでいた。
後ろ手に縛られ、衣服は全て取り払われているのだ。
まともな艦娘ならば、恐怖のひとつも覚えるだろう。
（私、何かに……突然海に引きずり込まれて……）
戦闘中、洋上から海中へと沈められた暁が気付くと、この部屋にいた。何も覚えていないが、今の状況が悦ばしくないということは分かる。
立派な淑女（レディ）を夢見て、姉妹たちの長女として振る舞う暁。
しかし、この場合だけは弱音を漏らしてしまいそうだった。

「はぁ……帰りたい……」
鎮守府という帰る場所には、提督・姉妹・そして仲間たちが待っている。深海とは本来、艦娘がいる場所ではない。
水の圧、重苦しい空気、何よりその暗さ――。
暁の発展途上の胸が、ふるふると震える。
寒いわけではない。ただ、不安だった。
こうしている間に、外で何が起こっているのか。
自分たちが、どうされてしまうのか。
小さな身体が、懸命に耐えようとしている……――。
「案ずるな。君のことは、私が必ず守ってみせる」

もうひとり、営倉にいる女性――暗い中でもキラキラと輝く、鍛え上げられた肉体を誇る超ド級戦艦・武蔵（むさし）。

まだまだ幼い暁を安心させようと声を掛ける彼女もまた、後ろ手に縛られていた。戦艦である武蔵がどんなに力を込めても断ち切ることは出来ず、敵ながらあっぱれと思うほどの技術を持っていると見抜いていた。

「この武蔵、幼い君を守るためなら……この身を盾にする。捕まっているとはいえ戦艦だ。逃げ出す隙くらいは生じるはず――地上と連絡を取り、他の捕虜と結束して……」

「こ、子供扱いしないで――――ください……っ!!私だって、戦えるから……っ!!」

「ふ――」これは、すまない。失敬した。君は立派な淑女（レディ）だ。だが、まず前に出るのは私だ……いいね？」

頬を膨らませるように抗議した暁を見て、武蔵は少しだけ心が和んだ。そしてより一層、この駆逐艦を守らなければならないと心を固める。身を挺してでも――……。

カッ

「シッ……!!」
「えっ!?」
「足音だ。静かに……!!」

武蔵の言葉通り、高いヒールの音が響いている。
元から静かな空間なので、女性モノの足音がよく聞こえた。
徐々に大きくなる音は、武蔵たちの営倉の外に近付く。
「暁、私の後ろに隠れていろ……前には、出るな……!!」
「で、でも私も――――っ」
「いいから下がれっ!! また、沈ませるわけにはいかんっ」
「……は、はい……」

「なっ……!?」

「むぎゅっ!?」

武蔵の豊満なお尻に追いやられて、暁は来訪者が見えない。部屋に入って来たのは――彼女たちがよく知る艦娘。

――の、はずなのだが。

「気分はどうかしら、武蔵……それに、暁ちゃん❤」

「高雄――――貴様……高雄、なのか……っ!?」

(ええっ、高雄さんがいるの……ってちょっと、お尻いっ!!)

優しかった瞳を鋭く光らせ、卑猥な服に身を包み、何より股間に備え付けられた男性器状のモノ――明らかに常軌を逸した高雄の姿を見せまいと、武蔵は暁を隠す。

「見違えたな、高雄……悪い夢であってほしいモノだ。我々を解放しに来たわけではあるまい」

「夢じゃないのよ❤
これから起きることも、ね❤」

「高雄、貴様の身に何があったかは分からん。だが……」

戦艦武蔵の名に懸けて、狼藉は許さない――。
言葉よりも前に、圧倒的な肉体が立ちはだかる。
いくら深素処置を受けた高雄といえど、武蔵を籠絡するのは簡単なことではないだろう。だが、武蔵の肉体は魅力的だ。
兵器としても、性欲の受け皿としても……。

正面からぶっかってもタダでは済まない。故に、高雄は別のアプローチを考えていた。

「暁ちゃん、いるんでしょう❤❤
私の前に出ていらっしゃい❤❤　武蔵のお尻に隠れてないで、ここから出してあげるわ❤」

意外にも、高雄が呼び出したのは暁だった。鎮守府にいた頃、淑女として憧れを抱いて接していた高雄が、あの時と同じ優しい声色を使っているのを聞き――。

「た……高雄さん……？」

「暁っ!?　出るな――っ」

「――あっ……えっ……？
高雄、さん……なの？」

「暁……っ!!
今の高雄は普段と――」

「私は正気よ、暁ちゃん❤
どうかしら、この肉体――素晴らしいでしょう❤
アナタも、私みたいになれるのよ❤　立派な淑女にね❤」

隠れていた暁が、改造された高雄を見て眼を丸くする。
憧れていた身体は淫らに誇示され、女性ではあり得ない
股間の膨らみ。明らかに正常ではない精神状態は、高雄の
心の奥まで作り変えられているということだ。
攻撃的な笑みを暁に向ける高雄は、無慈悲な言葉を吐く。

「暁ちゃん❤　アナタが私と来てくれれば、武蔵には
手を出さないわ❤」

「……っ!?」

「暁っ!!
罠だっ!!」

「戦艦と駆逐艦❤
戦術的に大事なのは、
こういう場合どちらかしら❤
よおく考えてね……暁ちゃん❤」

ギリィッ!!
「貴様ぁ……っ!!
何が目的だっ!? 私はここにいるぞ……撃って来いっ!!」
「怖いわねぇ❤ 武蔵が焦るって、そんなにこの子が大事？
ふふ――だったら、なおさらこの子はもらっていくわ❤」
「武蔵さん……艦隊には、武蔵さんの力が必要でしょ……。
私が行って――武蔵さんが助かるなら……私……。
でもお願い、きっと私を、助けに来てね……っ！」
後ろ手の拘束具を破砕するような力を行使するも、武蔵が
自由を得ることはなかった。初めて焦りを見せた武蔵を
嘲笑うような高雄の傍に、健気にも犠牲になろうとする
暁の姿があった。
「優しいのね、暁ちゃん❤
さぁ、行きましょう❤」
「……はい……」
「待てっ!! 高雄、貴様っ!!
暁、行くなっ!! 行くなぁぁぁ――っ!!」

薄暗い深海施設には、満足な照明などなかった。
営倉から出た暁は、逃走も抵抗も試みることなく、高雄の大きなお尻に付いて行く。たかが駆逐艦の力で、彼女に敵うとは思っていなかった。

「あ、あの高雄さん……私を、どうするの……？」

「なぁに、暁ちゃん❤　気になるのかしら？　ふふふ❤
心配しないで、立派な淑女（レディ）になれるからねッ❤」

「淑女に……」

鎮守府にいた頃、暁は高雄のような女性になりたいと考えよく交流していた。だからこそ、今の高雄とのギャップに違和感を覚えるのだ。

大きく張り出した胸とお尻、それを誇らしく振って歩く様。
それに――股間に生えている、男性器状のモノ。

暁が抱く理想とはかけ離れた、立派な淑女。
今の高雄は、到底淑女とは思えないが……従うしかない。

「さぁ、暁ちゃんも深素処置を受けましょうね❤
私の手で、可愛い暁ちゃんをもっと可愛くしちゃうから❤」

振り返りつつ暁を見た高雄の瞳は、醜く歪んでいた。
オンナとして性の悦びを知り、欲望の炎が渦巻く視線。
これまで抱いたことのない、無意識の嫌悪を感じて暁は思わず震える。しかし、囚われている艦娘――特に武蔵のことを思うと、抵抗は出来ない。

黙ったまま怯えつつ、暁は高雄に先導されて歩く。
しばらく歩くと、壁かと思うような扉を開き、高雄が笑う。

「着いたわ❤　さぁ、入りましょう❤」

「……っ」

小さな部屋だが、営倉よりはマシな部屋だった。
生活している痕跡がある、何より――高雄の匂いがする。

「この部屋で、暁ちゃんと愛し合うのよ❤　どうかしら？
深海にあるこの施設では珍しく、住めるようにキレイにしているつもりだけど❤」

ねちっこい言い方をする高雄をすぐ傍に感じながら、
暁は戦慄していた。

――愛し合う――。

確かに、そう言った。
裸の暁と、肉棒を携える高雄。
行われる行為を、知らないわけではない。

だが……こんな場所で、こんな時に。
どういう状況になっているか分からないまま、明らかに
様子がおかしい高雄と、ふたりきりで――。

「高雄さん……おかしいよ……こんなの……ダメ……」

「あら、私と愛し合うのはイヤ？　でもね、ダメなのよぉ❤」

「少尉が望んでいるのは、深素が溢れた世界❤　さぁ、暁ちゃんも私と一緒に気持ち良くなりましょう❤」

「少尉……少尉って誰――――きゃぁっ!?」

暁は自分で振り返ったわけではない。高雄に強烈な力で引き寄せられたのだ。眼の前にある大きな胸からは、甘く誘う香りが漂う。近くに来れば来るほど、憧れていた女性が傍にいるという事実に鼓動が早くなり、戸惑っていた。

「この施設の主であり、私たちの主でもあるお方❤　暁ちゃんも、きっと気に入ってもらえるからね❤」

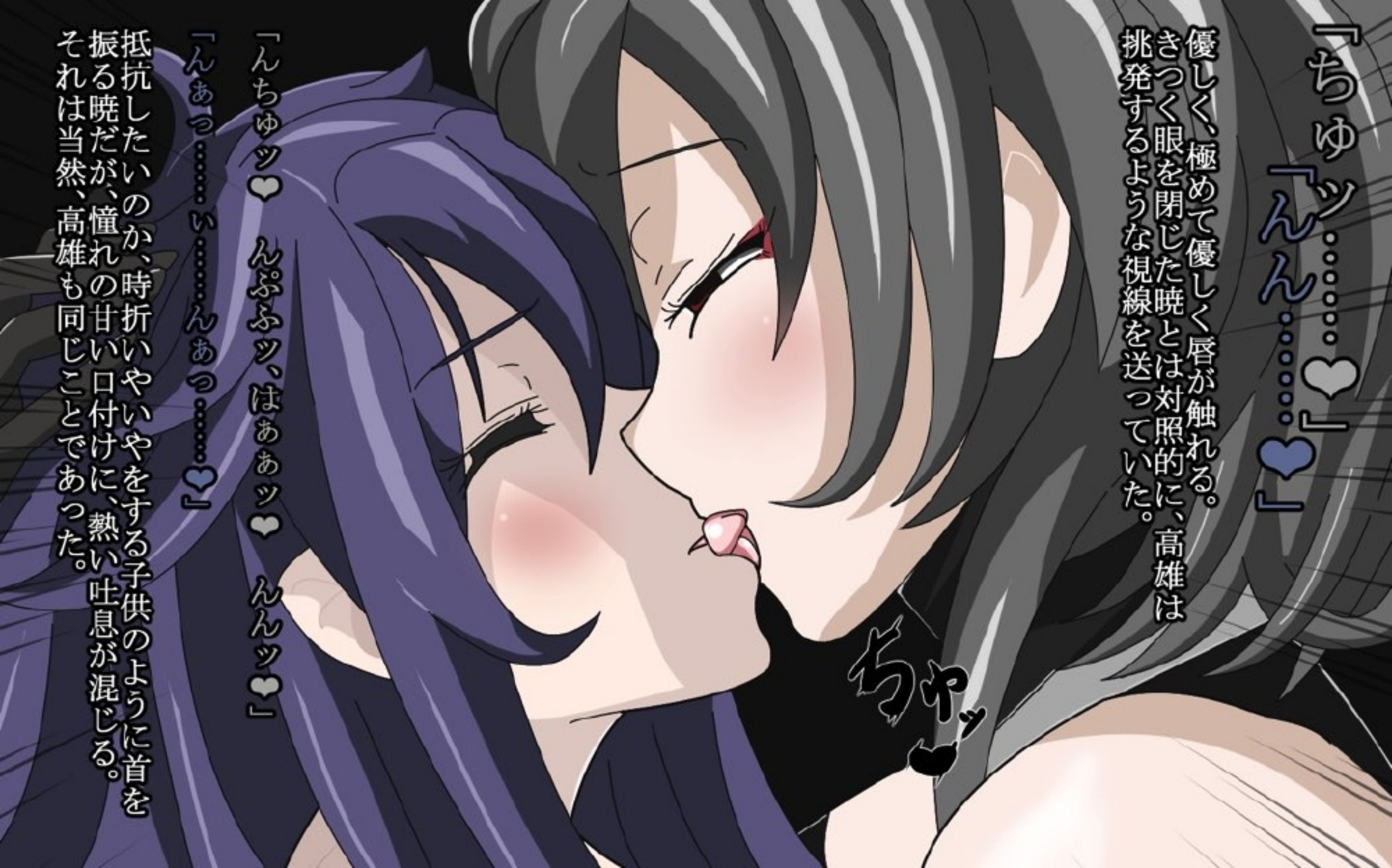
この時、暁は初めて理解した。高雄の言葉から、高雄が何らかの手段でまともな思考と判断を失っていることを。

そして、理知的で常に冷静だった高雄が瞳を色欲に染め、暁のことを性的に捉えるような見つめ方をしていること。

「や――やだ……助けて……高雄さん……っ!!」

「助けなんて来ないわ❤　そう、暁ちゃん……アナタが皆を助けてあげなさい❤　深素という新しい力でね❤」

頑なに拒む暁に対し、高雄は顔の高さを合わせると――。


『ちゅッ……♥』
『んん……♥』
優しく、極めて優しく唇が触れる。
きつく眼を閉じた暁とは対照的に、高雄は
挑発するような視線を送っていた。
ちゅッ♥
「んちゅッ♥ んぷぷッ、はぁぁッ♥ んんッ♥」
「んぁっ……い……んぁっ……♥」
抵抗したいのか、時折いやいやをする子供のように首を
振る暁だが、憧れの甘い口付けに、熱い吐息が混じる。
それは当然、高雄も同じことであった。

何とか逃げようとする暁は、襲って来る高雄の舌を避ける。それでもなお追って来る高雄の方が、一枚上手だった。

（逃げてもムダよ♥　私からは逃げられないわ♥）

（高雄さん……ダメっ♥　何で、こんなにキスが上手なの♥これがオトナのキス……淑女（レディ）なんだ……あぁ、私ぃ……♥）

結果的に、暁の可愛らしい口内は自身と高雄の唾液で溢れ、言葉も無くただ唇を貪り合う水音が響く。

汗が浮かび、絡め合う舌にも力が入る。次第に暁も拙さは残るが、高雄の舌を求めていた。初心（うぶ）な少女の心には、憧れである女性とのキスは甘い甘い毒――瞬く間に浸透していく分泌物は、暁の心と体を確実に蝕んでいた。

深く、深く――どこまでも柔らかく、沈んでいく。

（馬鹿な子❤　必死にキスしちゃって……可愛いわぁ❤）

深素処置を受け、思考まで変貌した高雄は、心の中でほくそ笑む。彼女から湧き出る体液、全てが純度の高い深素なのだ。何も知らない暁は、甘美な快感に任せるまま夢中になって唇を求めている。その小さな身体に、既に深素が入っていることを知らずに――憧れているという立場を利用し、無垢な身体を自らの手で深素に染め上げるということに、高雄の肉体は怒張ごと、ビクリと震える。

（いけないことしてるッ❤　んんッ、興奮するわッ❤❤❤　暁ちゃんなら、きっとイイ淑女に❤　なって、んぁッ❤　私たちのために働いてくれるッ❤）

微笑む瞳は歪み、ドス黒い欲望が溢れ出しそうだった。

鎮守府にいた時、好意を抱いて接して来る暁のことを嫌う理由などない。深素処置を受けた高雄が手に入れた虜囚の資料に、暁と武蔵を見つけた時――彼女は考えたのだ。

まずは暁から手を付け、深素処置を施す。圧倒的な火力と装甲を誇る武蔵だから、正攻法では籠絡出来まい。だが、守るべき存在である暁に責められたらどうだろうか。耐えられまい――いかに強靭な肉体と精神を以てしても、心を抉るような状況になったら……高雄は来たるべき未来を愉しみながら、暁との口付けに力を込める。

（変えてあげるわ、暁ちゃん❤　私の手で、ね――❤　心も体も、素晴らしい淑女（レディ）にしてあげる、うふふふ……ッ❤）

艦娘にとって強力な媚薬のような深素を、暁は夢中になって取り込んでいる。最愛の高雄とキスしているという状況が、さらに思考を鈍らせていた。

（何だろう……すごく、気持ちイイよ……❤　高雄さん❤高雄さんの唇、柔らかぁい❤　それに、すごくイイ匂い❤高雄さんと、私……キスしちゃってる❤　こんなに激しく❤気持ちイイよぉ……もっと、もっと強くしちゃっても……❤）

愛しいという気持ちを交換し合う行為を覚えた暁は、沈む沼に入り込んだように、その快感に溺れていく。

本来は警戒心を持たなければならない状況なのに――。いつも油断するなと口うるさく妹たちに言っている暁は、

（高雄さんだから仕方ないじゃない……❤　そうよ、だって立派な淑女なんだもの❤　こんなに、ふわふわするキスをされたら、気持ち良くなっちゃったって……っ❤）

自分に言い訳をするように、行為を正当化していく。快楽に流されるのは仕方のないことだと。自分が弱いわけではないと。

そう思う傍からまた、舌が激しく絡む――。

その考え方は、まさしく深素処置を受けたモノの思考だ。高雄の唾液に含まれた深素が暁の肉体を蝕み、意思による抵抗を出来なくさせる。快感に甘え、快感を与えるモノを讃え、嬉々として従う傀儡にしてしまうのだ。

既に暁の頭脳にまで深素が及び、どんな行為も疑わない歪んだ意思が塗り固められつつある。口付けを拒まないのがその証拠だ。若さゆえに歯止めが利かず、どこまでも貪欲になれるのは深素の適性が高いということでもある。

言葉も無く、ただひたすらに求め合う時間が流れる。舌が疲れないのかと思うほどに長い時間は、ふたりにとって互いを知り尽くす大切な時間だった。

言葉だけでは知り得ない、身体の中という秘めたる部分も、自分の力で快い箇所を探り当てるという、欲に基づいた行為。デリケートなところも、このヒトになら見せられるという心の甘えを、高雄は見逃さなかった。

「ぷはぁッ♥　暁ちゃん、ベッドに行きましょう♥　拘束は解いてあげる♥　一緒に気持ち良くなりたいな♥」

「はぁぁぁ……っ♥　高雄、さん……♥　う、うん……♥　私も、気持ち良く、なりたい……っ♥」

逃げ出すチャンスをみすみす見逃し、暁は誘われるまま風情の欠片もないベッドへ乗る。解放された手に戸惑いつつも、高雄を見つめる手は明らかに欲情していた。

既に、深素に侵されつつあるとも知らずに――――。

身体の大きな高雄に圧し掛かる暁が、驚きの声を上げる。
細く長い指が、まだ脂も乗り切っていない、暁の可愛らしいお尻を拡げ、孔(あな)の奥まで見えてしまっているのだ。
突然感じた奥底の感覚に、一瞬だけ正気に戻る。

「綺麗なケツ穴ね、それにマ○コも……♥ うふふッ♥ メチャクチャに穢したくなるわね♥ んんぇ……れろッ♥」

「たっ、高雄さんッ♥ そ、そんなに舐めるなんてぇっ♥ だ、ダメぇぇっ♥ ううう、あったかいよう……っ♥」

眼前にある暁の女性器に、思わず高雄は舌が伸びていた。
瑞々しい肉ビラと淫核を触る度、暁は面白いほど反応する。

「クリトリスに皮なんか被って❤　生意気なんだからッ❤」
「ひぁぅっ❤　あぁぁッ❤　高雄さんっ❤　やめてぇっ❤」
高雄が唾液交じりの舌を押し付けるごとに、暁は粘膜から深素を吸収していく。いや、吐く吐息にすら深素が混じっているならば、直腸からも吸収している。熟していない小さな身体に、重巡洋艦である高雄の深素は強烈だった。
慣れない愛撫と禁断の刺激に、暁はなすがままにされる。愛液はとめどなく溢れ、全身が火照り昂るのが分かった。
「このままイカせてあげるわ❤　気持ちイイところに連れて行ってあげるッ❤　覚悟なさい、暁ちゃんっ❤」
舌遣いが荒くなり、高雄はいよいよ本腰を入れる。その時、暁は思わず――そびえ立つ高雄の肉棒を掴んでいた。
「高雄さん……っ❤　高雄さんも、気持ち良くなってぇ❤」

「んんんおおおおッ♥♥♥♥」
ビクッ♥
自分の腕ほどもある高雄の肉棒を、暁は乱暴にシゴく。熱く脈打つ男性器など触ったこともないが、高雄のモノだと思うとたまらなく愛おしく――そして憎らしくもある。既に深素処置が始まりつつある暁は、その小さな肉体に秘めたる素質を開花させつつあった。
「えいっ♥ えいっ、このおっ♥ 暴れ過ぎよっ♥♥」
「暁ちゃんッ♥ もっとチ○ポッ♥ もっとチ○ポおお♥」
ゴシュッ♥
ゴリュッ♥
自分より立場も実力も上のモノを制御し、快感という舵で思うように操る――禁忌に触れる危うい嗜好は、淫語を撒き散らす高雄が教えてくれた、暁の素質だった。

だが、この暁の覚醒も全て、高雄の掌の上。

（うふふ……♥
必死になっちゃって♥
やっぱり、馬鹿な子♥）

他人の上に立ちたがる暁の性格だ。
きっと他のモノを制御する力、絶対的な力に溺れるに違いないという高雄の判断の上でのこと。
彼女を武蔵攻略の足掛かりにするというのは、本当だ。
だが、それには彼女自身が高雄と同じように深素を手にし、思うがままに操る快楽を暁が知らなければならないのだ。
ただ命令に従うだけの傀儡ではなく、最高の判断をし得る自立性も求められる。快感に溺れやすい未熟な身体は、ただ暴欲を貪る獣であっても困るわけだ。
少尉の秘書艦として誇りある生を謳歌する高雄だけでなく、これから地上へと足を伸ばしていく組織である。多くの同志、そして力を行使出来る幹部候補が必要なのだ。
それには階級・元の実力など関係無い。深素を使いこなし、深素を受け入れ、深素をより好いモノへ高めていく潜在的な【才能（センス）】――暁には、それがある。
少尉、そして高雄に従い、他を陥れる素質が……。

暁の心は躍っていた。卑猥な恰好をして、淫らな言動を繰り返していた高雄が、自分の愛撫で悶えているからだ。肉棒など触ったこともない、穢らわしいモノと思っていた。だが、高雄に生えた肉棒をシゴいてみれば、どうだ――。たちまちの内に身体全体を震わせ、暁の名を呼んで媚びて来るではないか。

（もっと強くシコシコしても大丈夫かな……？
でも、気持ちイイって言ってるし……もっとしちゃお❤
あはっ、何だか愉しい気分だわ❤　あの高雄さんがっ❤
この私の手でヨガってるなんて❤　ち、チ○ポ……だっけ。
チ○ポがビクビク震えて、ぼうっとするような匂いが
漂って来て……あぁぁ、イイ気持ち……いいっ❤）

肉棒をコスる度、先端から黒い液体が飛び出て来る。暁が知るはずもない先走り液を食い入るように見つめ、その漂う香りと達成感に、身体がさらに熱くなっていた。

（それに何よ、この――キンタマ❤　高雄さんのキンタマ❤
こんなにスゴいスタイルなのに、おっぱいも大きいのに❤
デッカいキンタマとチ○ポをぶらさげて――立派っ❤
高雄さんみたいな立派な身体を気持ちよくさせるのも、
きっと淑女（レディ）の役目なのよっ❤　そうに決まってるっ❤
もっともっと、気持ち良くさせないとっ❤❤❤）

小さな手に余る、高雄の陰嚢を転がしてやると――。
女性らしからぬ重い声を絞り出し、高雄は喘いでいた。
その反応が嬉しく、暁はさらに手を蠢かせる……！

互いに裸となって柔肌を押し付け合い、秘部をさらけ出す。
ふたりの興奮は極限まで高まっている。肉を貪る音と動き、言葉も無く求め合う様子はひどく原始的だった。
「高雄さん――♥」
「暁ちゃん、いいかしら♥　アナタの初めて……♥」
「……う、ん……♥」
至極当然といった様子で、ふたりは身体越しに会話する。
眼の前にある肉棒を愛おしく見つめ、どんな行為に及ぶか知らぬ暁ではない。
（こんなに大きいのを……ううん、淑女（レディ）にならなきゃ♥
きっと、本当の淑女だったら、チ○ポをマ○コで気持ち良く出来るはずだよね♥　高雄さんのマ○コも、気持ちイイはずだよね……チ○ポを突っ込めば、気持ち良く……♥）
「暁ちゃん、四つん這いになって♥――そう、イイ子ね……♥」
「はい……♥――こ、これでいい……♥」
高雄さん、優しく――」

「馬鹿ねッ♥ こんなマ○コを前に、優しくなんて出来ないわ♥ 一気に……ぶち込むわよおおッ♥」

みちぶぶ♥

「んっ――ぎいいいいいっ!? いっ♥ 痛いいいいいいっ♥」

ビクッ♥

ビクッ♥

必死にもがこうとしても、破瓜の痛みに涙が溢れて動けず、ただ高雄を睨み付けるように見ていた。

血が流れるのは一瞬だが、痛みがジンジンと伝わって熱になっていく。暁の可愛らしい自慰など忘れさせるような、直接的な性感。気持ちイイとは言い切れない、やり場のない想い――モノのように後ろから貫かれる気持ちは、暁を文字通り傷付けていた。

「高雄さん……痛ぁい……ひぐっ……痛いよぅ……」

「可愛いお尻だったから、つい乱暴になっちゃったわね♥でも、これからもっと乱暴にされちゃうのよ、覚悟してね♥」

「ひ……っ!? あぁぁぁッ、うぁぁぁぁぁッ♥」

パンッ♥パンッ♥

勢い良く腰を打ち付ける高雄は、暁を更なる絶望へと突き落とすような言葉を吐いた。肉棒で感じる暁の膣内は狭く、誰にも身体を許したことがない無垢なままだったのだと思うほど、高雄の男根はグンと熱さを増して強張る。彼女を征服出来たのだと、細胞ひとつひとつが悦んでいる。

「あぁぁぁぁッ♥ 高雄さんっ♥ 激しいぃぃっ♥♥」

（どうしてっ❤　痛いだけだったのにっ❤　段々……❤）

体格差を活かした激しい抽挿に、悲鳴交じりに喘ぐだけだった暁の声色に、艶が混じり始める。明らかに紅潮した肌と、荒い吐息は性器で快感を得ている証だ。

「暁ちゃんッ❤　オンナというモノはね――いいえッ❤　敗者は犯されるしかないのよッ❤　犯されたくなかったら勝ちなさいッ❤　勝ち続けて、犯してやればいいのッ❤❤」

犯してやればいい、という高雄の言葉に暁は大きく震える。犯される痛み、負ける苦しみは今、知っている。だが――。高雄はどうだ。淫らに腰を振りたくり、舌を突き出して快感を貪っているではないか。

（ずるいっ❤　高雄さんだけ犯してっ❤　ずるいよっ❤❤　私はこんなに痛くて――違うっ❤　気持ちイイんだっ❤❤　私も……私も……ううううううっ❤❤）

憧れの高雄に犯されるという異常事態に、暁の思考はまともに働いていない。全身を揺さぶるほどの快楽がそのまま意識を塗り潰し、甘い毒が回っていく。

深素という、毒が――。

無邪気でありながら、淑女という姿を目指した暁。高雄によって歪められた価値観の中に、ひとつの答えを見つけつつあった。

「高雄さぁんっ❤　もっと❤　もっとしてええええっ❤❤」

「ふッ❤　ふぅッ❤　おッ❤
んんッ❤　ほらッどう❤
メスはチ〇ポに勝てないのよッ❤❤
私のチ〇ポに負けるのよおおッ❤❤」

腰を振る快感、それと処女を引き裂いた倒錯感が重なり、高雄の精神は完全に深素にやられていた。頭の中はただ眼の前にいるメスのことだけを犯す行為が繰り返され、肉棒から与えられる悦楽に従う傀儡となる。

豊満な重巡洋艦の肉体は、ひたすらに性を貪るだけの淫ら極まりない凶器と化し、打ち付ける腰は男性顔負けの迫力を持っていた。

感じているのは暁も同じだ。幼い身体で、懸命に高雄の肉棒を受け止め、子宮までこじ開ける長さ、未熟な膣を強引に押し拡げる太さを受け入れつつあった。

「高雄さんっ❤　高雄さんのチ〇ポっ❤　もっとおお❤
もっと頂戴っ❤❤　深いところまでズボスボしてえっ❤」

「ふぅぅぅぅぅぅぅッ、キツイッ❤❤　暁ちゃんッ❤❤
マ〇コがうねうね絡み付いて来るわぁぁッ❤　最ッ高❤」

口付けなどの生易しい行為ではない、性行による深素の処置だ。深々と侵蝕されている高雄でさえ耐え難い快感を、暁が耐えられるわけがない。すぐに肉体も精神も、若さに任せた好奇心と探求心に後押しされ、邪に塗れていく。

あまりの快感、そして新しい仲間の誕生に――――。
高雄の美しい顔は歪み、歯を喰いしばっても涎が溢れる。
それでもなお腰の動きは止まらず、強烈な刺激をさらに送り付けて来て――保つかどうかなど、分かり切っていた。

「おおおおぉッ❤　射精ッ❤　暁ちゃんのマ〇コにッ❤
私の深素ザーメンをたっぷり射精すからねッ❤❤❤」
「あぁぁぁッ❤　私もっ❤　私もどうかなっちゃいそう❤
何これっ❤　怖いようっ、高雄さんっ❤　あぁぁぁッ❤❤」
高雄の腰遣いが速度を増し、暁の秘肉を引きずり出さんとするような力強い打ち付けに変わる。
あまりの衝撃に悲鳴じみた声を漏らす暁だったが、裏腹に幼い性器は高雄の男根へ愛おしそうに喰らい付き、共に快楽を貪って本能的に性の絶頂へ至ろうとしていた。
「高雄さ、んッ❤　私を――暁をッ❤
立派な淑女にしてえええええッ❤❤❤」
「いいッ❤　いいわよぉッ❤❤　アナタを立派な淑女に❤❤
チ〇ポで艦娘を狂わせる、深素の素晴らしさを伝えるッ❤❤
最高の淑女にして――おおおおおおッ❤❤」
「イッぐううううううッ❤❤
あぁぁっ高雄さぁぁんっ❤❤」
ピクッ
ピクッ
グボッ
ズボッ

『おおおッ♥出すわッ♥♥♥
深素ッ♥私の精液をッ♥♥♥
受け取りなさぁぁぁぁいッ♥』
『あぁぁぁぁっ♥熱いっ♥
熱いのが来てるうううっ♥♥』
ビグッ♥
ビグビクッ♥
ビクッ♥
ビクッ♥

「おおおおッ❤ おっほッ❤ 深素ッ❤ 射精てるッ❤ キンタマから迸るぅぅッ❤ うひひッ❤ 気持ちイイッ❤」
精を放つ快感に酔い痴れ、高雄はみっともない顔を曝す。
股間から伝う、本来では感じ得ない肉棒からの吐精は、
高雄の理性をことごとく破壊していた。
「あぁぁ……あぁ……私の中にい……うはっ❤❤
た――高雄さんの精液がぁ……はぁぁっ、熱いようっ❤」
同じく、性の頂へと到達した暁が、熱っぽい吐息を漏らす。
まだ自分の膣内で感じる射精に逞しさを覚えつつ、余韻に
浸り――全身へと深素を巡らせていく。
幼い暁の肉体は、瞬く間に深素を吸収する。己のモノとして
使うべく思考すらも書き換え、洗脳されているなどと
疑うこともなく、ただひたすら追い求めるのだ。
捻じ曲げられた、暁の目標を……。
「私も――私も、淑女になるんだ……あはっ、ははッ❤」
ゴプッ
はッ❤
はッ❤

――――産声が、聞こえた。

少尉、そして高雄と同じように深素を取り込み、己が力として行使出来るようになった存在が誕生したのだ。

同族の気配とでもいうのか、それとも少尉だからこそ感じ取れる深素の成せる業か、はっきりと理解出来た。

秘書艦としての高雄は優秀だ。命令通りに動き、加えて彼女なりにどうすればいいかを、常に考えている。少尉にとって一番好ましい結果を手繰り寄せるために、どんな奸計も行動に起こす、頼もしい存在になった。

（海の底で黙っている気は無い、いずれ地上へ……！）

高雄が働いている間、少尉は特研浮上のための手を入れ、施設そのものが大きな深素の生命体のようになるよう改造を進めている。外国の海の伝説にある、大きな頭足類の類のようだが――今の少尉たちには、よく似合う。

無論、浮上そして侵攻のためには、今よりも手駒が必要だ。深素を以てすれば、忠実な僕（しもべ）を造り出せる。もし深素を活かすことが出来ないならば、深素を吐き出す精製機関にでもすればいい。

今し方聞こえた産声は、高雄が新しい僕を造ったのだろう。彼女の深素もまた、宿主に似て優秀だ。理想といえる数値を記録し、重巡洋艦の力を得た深素はより強力に……。

「少尉、お待たせ致しましたわ❤　さぁ、入りなさいッ❤」

頼もしい秘書艦と共に入って来た艦娘は――――。
『初めまして、アナタが少尉ね❤　話は聞いてるわッ❤』
『もう、言葉遣いに注意なさい。申し訳ありません、少尉』
元気良く挨拶すると、深素に溢れた肉体を見せつけた。
やはり、高雄の能力の高さを認めざるを得ない。
本来の姿とはかけ離れた姿に、本人も全く驚いていない。
むしろ、誇らしくしている。

『私、これから少尉のために頑張っちゃうから❤』

頼もしい言葉に、また高雄が口を挟むが、これもまた彼女らしさと思い――少尉は仕草で制した。
「ねぇ少尉ぃ❤　私、早く自分の力を試してみたいの❤」
「全く……少尉、この通りです❤　この子の深素処置は滞りなく完了致しました❤　問題が無ければ、次の処置に移行致します❤　よろしいですか？」
無論、問題は無い。今後のために、いち早く戦力を得たい。

『やったぁ❤　待っててね、少尉ッ❤　私の深素で、あの武蔵を手に入れてみせるからッ❤　あははッ❤❤」

「あらあら、すっかりヤる気❤　壊さないか心配ねぇ❤武蔵は私たちのために、しっかり働いてもらわないと❤少尉、私も同行致します❤　見届け次第、次の行動に❤」

『もう、見くびって❤　私だって立派な淑女(レディ)なのよッ❤」

ふたりは先を争うように、部屋を出て行った。

超ド級の戦艦である武蔵を手に入れる――成功すれば、少尉たちの大きな味方になるだろう。高雄はそこまで見越して、まず小さな淑女に深素処置を施したのだろうか。

（高雄――やはり素晴らしい。優秀な右腕だ、申し分ない働きをしてくれる……秘書艦に留まるだけでは、惜しい）

高雄も知らない次の段階を、少尉は胸に秘めている。だが、まずは新しい深素処置体の情報を解析するため、少尉は再び机に向かうことにした――。

一方――――営倉内。

武蔵の心中、決して穏やかではない。
連れて行かれた暁のことを思うと、気が気ではなかった。
（私が代わりにはなれなかったのか……何故、高雄は……。
いや、まだどうなかったは分からない。まだ――――）

武蔵が最も危惧しているのは、暁の命が危うくなるようなことだ。彼女がその身を犠牲にしてまで守られたとしたら、そこまで不名誉なことはない。幼い命を生け贄にしてまで、無事でいていいわけがない。少なくとも、誇り高き艦娘、戦艦・武蔵はそう思っていた。

カツ

同じ歩幅、同じ靴音――また、高雄が来たようだ。
（高雄め――――どんな顔で私の前に出る気だ……!!
暁、お前に助けられた命だが、次第によっては――っ!!）
重い扉を睨み付け、来訪者が姿を現すのをじっと耐える。

「高雄おおっ!! 暁はっ!? 暁はどうしたっ!? 言えっ!! 答えによっては貴様を――っ!!」

「あら、ちょっとビックリしちゃった❤ 入って来るなり大きなおっぱいが迫って来るんですもの❤ うふふっ❤」

もしも拘束が無ければ掴みかかりそうな勢いで、武蔵は高雄へ肉薄する。圧倒されることなく、高雄は笑っていた。

「ふざけるなっ!!」

武蔵の怒気に、高雄はやれやれと首を振っていた。

「そんなに怒らなくても、暁ちゃんは無事よ❤ そんなに会いたければ、今すぐにでも――❤」

「あはははッ❤ 武蔵ってば、そんなに私のことが心配なんだぁ❤ 嬉しいなぁ、わ・た・し……❤」

「そ、その声は暁……っ!! 無事だったんだな!?」

武蔵の耳に聞こえたのは、確かに暁の声だった。高雄の後に続いて部屋に入って来た少女は、確かに暁の面影がある。

「ええ、無事よ❤ 高雄さんに可愛がってもらっちゃった❤ 深素を扱える、立派な淑女(レディ)になったのよ❤ スゴいでしょ❤ 私も武蔵に会いたかったの❤ 力を使いたくて❤」

「し――深素……? 暁、何を言って……」

その声は、確かに暁のモノだ。しかし、どこかねっとりとした熱がある。

カッ

駆け寄りたかったが、武蔵は踏み出せない。

「見せてあげなさい、暁ちゃん❤ 生まれ変わったアナタの姿をね❤」

「暁……?」

「はぁい、高雄さん❤ 武蔵、よおく見てね❤ これが私❤」

「これが淑女（レディ）の身体❤」

「生まれ変わった私の身体❤」

「チ〇ポだけじゃないのよ❤」

「深素を吐き出す尻尾まで、んッ❤あるんだからッ❤　ほらッ❤❤」深素って最高ッ❤❤

「あはッ❤　この身体で武蔵のこと、メチャクチャにするんだからッ❤覚悟しなさいよねッ❤❤」

「どう、武蔵❤　これが新しい私ッ❤❤
深素の力を手に入れた、暁の姿よッ❤❤❤❤」

高々と宣言する暁の姿に、かつての愛らしさなどなかった。
高雄と同じように卑猥な衣装に身を包み、少女の体型に
不釣り合いな肉棒を備えている様を見て、彼女の心も肉体も
塗り潰され――文字通り「生まれ変わった」と言う他ない。
キツイ目付きは攻撃的で、手に持つ鞭は飾りではないはず。
他人を力によって制することに悦びを感じ、無邪気な性格は
支配することで心が満たされる、歪んだ嗜好へと変わって
しまったのだろうか。

「あははッ❤　驚いて声も出ない？
それとも、私に見惚れてるのお？」

――違う。

そう言いたかった武蔵が、思わず
言い淀むほどに、衝撃が大きかった。
肉体は暁、心も暁なのだ。守りたかった暁が、このような姿に
なって、平静を装っていられるはずがない。
嘲笑うかのように蠢く、黒光りする尻尾。暁の意思ひとつで
自在に動く異質なモノが、さらに武蔵を追い詰める。
（違う――違う、こんな……暁が、こんな……っ！
こんな姿になるなんて……私は、あぁ……暁……っ!!）
不本意にも守られた存在であるモノが、武蔵の前に――。
それも、豹変した姿で……武蔵は、何とか声を絞り出す……。

「高雄……貴様……暁に、何を――何をした……っ!!」

掠れるような声は、武蔵のモノとは思えないほど弱々しい。

「何って、決まってるじゃない❤　私のチ○ポを、暁ちゃんにぶち込んであげたのよ❤　気持ち良かったわぁ❤」

「そこまで堕ちたか……よくも、暁を――――っ!!」

「武蔵、何を怒ってるの？　高雄さんに手を出す気？　そんなの、許さないから」

「あ、暁……っ!?」

体躯を活かしてぶつかれば、高雄ぐらい吹き飛ばせるかもしれない。だが――立ち塞がったのは、暁だった。守るように高雄の前に立ち、武蔵を睨む。

「イイ子ね❤」

身動きが取れない武蔵を蔑む冷笑を浮かべ、高雄は満足そうに暁の尻尾を撫でてやった。

「あはぁぁんッ❤　高雄さん、いきなりしちゃイヤッ❤❤」

「暁っ!?」

明らかな嬌声に、思わず武蔵が驚く。幼いはずの暁が出せるはずもない、オンナの声色だったからだ。それだけ、高雄の手によって歪められてしまったのだと、武蔵は理解する。

「うふふッ❤　イイ反応ね❤　さぁ暁ちゃん、分かるわね❤」

「はぁい、高雄さん❤」

尻尾をひと撫でされただけで、ふたりは意思の疎通が出来るようだ。

「よせ……暁……っ!?」

「武蔵、アナタは私の僕(しもべ)になるのよ❤　誰にも負けない兵器になって、私たちのために生きる艦娘にしてあげるッ❤」

「暁っ!?　高雄…っ」

にじり寄る暁と高雄に、武蔵はうろたえながら追い詰められていく。逃げ場はどこにも、無い――。

「あぐっ!?」

「情けない声を漏らすわね、武蔵❤――暁ちゃんだけじゃあないわ❤――私たちふたりで、たっぷりと遊んであげる❤」

「高雄……っ」

枷をした武蔵の手をさらに固めるように、高雄は周り込む。緊張した武蔵の香りを愉しむように鼻を鳴らし、褐色の肌に不躾に勃起しつつある男根を擦り付け、ニヤついていた。

「貴様がどこまで堕ちようと……私は屈しない……っ!!

私は大和型二番艦、武蔵!! 舐めるなよ、高雄……っ!!」

身をよじって抵抗するどころか、武蔵は慌てた様子も無く落ち着いて言葉を紡いでいた。裸のまま、しかも拘束されているという状況でもなお、彼女は気丈な振る舞いが出来る。

それほど高貴な存在であり――魅力的なのだ。

「ですって、暁ちゃん❤ さぁ、好きにしていいわよッ❤」

「はぁい❤ 覚悟しなさい、武蔵ッ❤ あぁぁ――」

「暁、何を――――っ」

「んんんうぅむッ❤❤❤」
「くううっ!? 暁いっ!?」
ちゅうううっ❤
むぎゅっ❤

武蔵の豊満な胸、その乳首に暁が吸い付く。突然訪れた舌の温かみに、暗く閉ざされた空間で冷えていた身体が驚いた。

「んちゅッ♥　んくッ♥　んちゅるッ♥　んちゅぱッ♥」

「そ、そんなに吸うな……暁……っ」

「あらあら、まるで赤ちゃんね♥♥
おっぱいにむしゃぶり付いて♥」

乳飲み子のように、暁は乳首を吸う。
左手はもう一方の乳房を握り締めてもなお
掴みきれないほどの大きさで、柔らかい。

やや乱暴な、まさしく子供のするような行為に、
武蔵は甘い信号を認めまいと顔を逸らしていた。

「く……ふっ……」

「誇り高い戦艦武蔵は、胸で感じるのかしら？
少しだけ息が上がってるみたいですわ♥」

「う……うるさい……黙れ……っ!!」

言葉と裏腹に、確かに武蔵は感じていた。
大きな胸を刺激される、それも暁に……。
意識が嫌でもそちらに向いてしまい、抗えない。

ちゅう

ちゅう

ぎゅむ

（何故だ……何故、こんなに気持ちイイんだ……）

武蔵は知らない。暁の唾液から、深素が浸透していることを。
邪悪に心を支配された、恐怖の兵器になりつつあることを。

一心不乱に乳首を吸う暁。本当に幼児のように有り様だが、その胸中は淫靡な感情がドロドロと渦巻いている。

眼の前にいる武蔵はもはや、憧れの存在ではない。思考を矯正された彼女にとって、支配者である存在の欲――。そう、欲望を満たすためだけに存在する、手に入れるべき存在。そう思うだけで、口の動きが忙しくなる。

（何よッ❤　武蔵のくせにッ❤　こんなにッ❤　こんなに大きなおっぱいを……このッ、こうしてやるッ❤）

それまで与えなかった、甘噛みとは違う明確な痛み。荒く熱い息を吐く傍らに立てた歯は、暁の嫉妬だろうか。自らに無いモノを持ち、それを手に入れようとする己の支配者たち。どうすれば自分が認めてもらえるのか――。

答えは簡単だった。

「ひぅぅぅっ❤　噛むなぁっ❤　暁……っ❤」

ちょっと悪戯しただけで情けなく身体を震わせ、乳首を充血させる武蔵を――暁自身の手で屈服させるのだ。

暁無しでは生きていけないほどに隷属させ、徹底的に誇りを殺ぎ落とす。守ろうとした存在に媚びを売るようになる姿を想像すれば、暁の男根と尻尾がビキビキと硬さを増した。

（私を守れなかったくせにッ、武蔵なんて❤　絶対、私のモノにしてやるんだからッ❤❤❤）

口いっぱいに頬張るほど大きな乳首を転がし、弄び、噛む。いつしか深素混じりの涎が溢れ、幼子のように冷たい地面にビチャビチャと滴り落ちても、暁は責めを緩めなかった。

（はぁぁッ❤　好きッ❤　武蔵、好きだよおおッ❤❤❤）

（くっ……耐えろ……武蔵……聞くな、感じるな……っ）

暁からのダイレクトな好意に、武蔵の心は大きく揺さぶられていた。意識しないように己を律しても、甘く切ない快感の心地が、徐々に身体に現れ始めていた。

「どうかしら、暁ちゃんの具合は❤　うふふッ、訊くまでもないみたいね❤　ぷっくり膨らんだ乳首に、脚をよじらせている様子を見れば、ね……いやらしいメスの匂い、私にまで漂って来るわぁ……はぁぁ、んん……ふぅぅ～～ッ❤チ○ポがギンギンになる、ドスケベな匂い……武蔵い❤❤感じてるのね、おっぱいちゅうちゅうされて――ッ❤❤」

「黙れ……高雄……その穢らわしいモノを、この私に……！近付けるな……くそっ!!　離れろ――っ!!」

浅ましく鼻を鳴らし、耳元で高雄は囁く。おそらく、その顔は淫蕩に歪んでいることだろう。ねっとりとした息遣いの中にこれからの行為の期待が含まれているのか、大きなお尻を撫で回すように肉棒からの先走りを塗りたくられ、武蔵は嫌悪感を露わにしていた。

「んっふッ❤　おふッ、ふんッ❤❤さすが、戦艦の肉体ですわ❤❤❤思わず、ぶち込みたくなって、んッ❤腰が動いてしまいますわ、ほぉッ❤」

「高雄……くぅぅ……っ」

強引に振りほどこうとしても、拘束は決して緩まなかった。

焦りと快感が入り混じり、武蔵の美しい褐色の肉体から甘い香りが、ほのかに漂い始める。その香りは、深素処置を受けていない艦娘であろうとも心を惑わせる、魔性の媚香でもあった――。

「……いっそ、殺せ……っ!!」

武蔵の言葉を聞いて、暁はキッと睨み付けた。

（生意気よッ♥　こんなに気持ち良くなっておいて……♥
いやらしく乳首を勃起させてるくせにッ……あ、そうだ♥
武蔵を私のモノにするんだ……だったらこれくらいッ♥）

ぐにゅにゅにゅるッ♥♥

ふぅッ♥

むふぅッ♥

暁は、武蔵に気付かれないように尻尾を這わせる。

（んっふぅぅぅッ♥　尻尾まで敏感になって♥　ふぅ♥
気持ちイイの……ふたつも感じちゃうッ♥）

蛇のように蠢き、武蔵のわき腹のあたりに潜む尻尾。
男根のような形状の尻尾を自在に操り、暁は力を込めた。
すると、獲物を捕らえるかのように狙いを定め、本当の蛇のように、牙状の歯を剥き出しにし口部分を露わにした。

（くッ♥　喰らいなさいッ♥　私の深素を、直接うッ♥）

高雄は意図を汲み、嗜虐的な笑みを浮かべていた。

「ふぅうんむッ♥♥♥♥」
「ぐッ!? な、何――ッ!?」
ギギッ
ドクッ
ドクッ

武蔵に噛み付いた尻尾を通じ、暁の深素が流れ込む。熱くドロドロとした液体が身体を駆け巡る感覚に、武蔵も表情を歪め、小刻みに震え始める。

「あらあら、暁ちゃんったら♥　武蔵をひとり占め？」

「何をした……身体が……胸が、熱く……ッ♥」

「ちゅうぅッ♥　んふッ♥」

戦艦としての武蔵の肉体が、暁の深素を拒んでは熱を生み出す。外から施される甘美な快感とは違う、己の身体が生み出す自発的な快感は暴力的だった。鍛え上げた武蔵の身体だからこそ、抗おうと強く反発するのだ。深素が加わったことにより、武蔵の肉体はより凶悪になりつつある。

本来では得られないはずの、激しい絶頂を貪るような身体に……。

「くううっ♥　暁いっ、やめろぉ……♥　な、何かが……胸が……あぁ、熱いっ♥」

「んぢゅッ♥　んじゅるるッ♥♥　んんふむッ♥　むふッ♥　んぢッ♥♥」

「乳首っ♥　か、噛むなっ♥　あっ♥　何だこれはっ♥　む、胸がっ♥　弾け――ぐううっ♥♥」

ドクン♥　ドクン♥

駆け巡った深素が、武蔵の力を吸収し再び現れる。ひと際強く、暁が乳首に歯を立てた時、快感が爆発した。

ドクンッ♥

「う――あぁぁぁぁぁあっ♥♥♥♥む、胸が爆発する……ううううっ♥♥♥♥
ブビュルッ♥
ビュルッ♥
ビクッ♥
「んじゅッ♥ごくッ♥ごくんッ♥んくッ♥んじゅるるるるッ♥♥」
ビクッ♥

主砲を撃ち放った時のような解放感が、武蔵を支配する。
本来の肉体ではあり得ない噴乳の快感は、力強いはずの彼女を甘く蕩けさせ、思考にまで魔の手が及び始める。

「な、何故だっ!? ど、どうして……っ❤」

「いやらしいおっぱいになりましたわね、武蔵❤ 深素をドクドクと溢れさせて❤」

「んちゅつるッ❤ ぢりゅるるッ❤」

「深素だと……わ、私の身体に、何が――っ❤ はぁっぁぁぁっ❤ ま、まだ出るっ❤❤」

未だ身体を震わせ、深素混じりの母乳を溢れさせる武蔵。
思考よりも先に身体が従順になり、暁に吸い付かれる度に戦艦の力を吸収した深素を吐き出してしまう。

暁もまた、力強いエネルギーをさらに吸収しようとする。
本当の乳飲み子のように遠慮も無い。
まさに自分のモノだと云わんばかりだ。

（美味しいッ❤ 武蔵のおっぱい❤ 甘くて蕩けそうだよう……もっと、もっと飲みたいッ❤❤）

吸着する音が響き、武蔵は耳からも事実を突き付けられる。
淫らに改造されつつある身体――だが。

「この程度……くっ❤ 何ともないぜ……っ!!」

やはり戦艦か、その心は未だ折れていない。

「ですって、暁ちゃん❤ ――うふふ、拘束は解いてあげるわ❤ おっぱいが切なくて、暴れることも出来ないでしょう❤」

高雄は、言葉通りに武蔵の拘束を解き、突き飛ばした……。

ガバッ
「――っ♥♥」
突き倒されても、武蔵は反抗的な瞳を止めない。
まだ抗っているのだ。
眼鏡の奥に光る瞳は、そう訴えていた。
それがたまらなく――暁と高雄の欲望を滾らせる。

体内に深素を取り込みつつある武蔵の肉体は、劣情に苛まれ燃え上がるような熱気を吐き出している。メスの匂いを振り撒く大きなお尻を見せつけるように突き出してなお、気丈に振る舞っているのはもはや、滑稽に映るほどだ。

「本っ当にいやらしい身体ね❤　武蔵がこんなに淫乱な艦娘だったなんて、思いもしませんでしたわ❤　うふふ❤」

「……くぅぅぅっ❤」

「期待にぬらぬらテカってるお肌❤　お乳の出る大きなおっぱい❤　それにこのお尻……ごくッ❤❤　私のモノにしていいなら、今すぐチ○ポをぶち込みたいぃ❤❤」

高雄の言葉通り、彼女は逸物を昂らせている。鍛え上げられた肉体をさらけ出し、秘部を見せつけるような態勢で睨まれてなお、蔑むように笑い返す余裕すらある。

大きなお尻、その隠すべき孔までも興奮してぬらつき、今にも愛液が滴り落ちそうな女性器は、肌から浮かび上がる可愛らしい桃色をしていた。陰毛も綺麗に整えており、武蔵の女性としての部分は非の打ちどころが無かった。

「マ○コはピンク色なのね❤　処女――ってことは無いと思うけど❤　あら、ケツ穴も大きくて美味しそうね❤　自分でオナニーにでも使っているのかしら❤❤」

「高雄っ❤❤　それ以上は許さんぞっ❤❤❤」

「ふたりでばっかり盛り上がって❤❤　武蔵はねえ、私のモノにするんだからッ❤❤❤」

「あ、暁っ!?」
「ふふ、そうね❤　ここは暁ちゃんに任せたいかも……やってみて❤❤」
「大きくて、綺麗なお尻❤これを私のモノに出来ると思うと、ゾクゾクしちゃうッ❤❤」
暁が武蔵の後ろに陣取ると、高雄は素直に退く。守るべき存在に苦しめられる武蔵の姿を想像し、しっかりと肉棒を滾らせながら。
一方、暁の小さな手に握られている鞭は、罰を与えるためのれっきとした調教具だ。
重く黒光りする得物を強く握り、暁は武蔵を見下ろして舌舐めずりしていた。
「武蔵のおっぱいを飲んでから、力が沸き上がって来るわ❤早速、お礼をしなくちゃね❤　覚悟しなさい、武蔵ッ❤❤」
暁が本来持っている無邪気さに、深素が加わった今――。戦艦の力を有した深素を再び取り込み、さらに力を手に入れ気が昂っているのだ。
これから行われる行為を、武蔵は容易に想像出来る。
「暁っ❤❤　お前はこんなことをする子ではなかった❤まだ……まだ間に合うから――正気にっ❤❤」
懇願するかのような武蔵のか弱い声が、暁の最期の理性を吹き飛ばす。支配欲が、これまで培ってきた暁の全てに勝った瞬間でもあった。
「ゴチャゴチャ――うるさいッ❤❤」
ズッ❤❤
ザッ

ビッ
「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ♥♥」

「……っ❤」

威厳ある戦艦とは思えない驚きの声が響いたと思えば、振り下ろされた鞭の紅い痕が、大きなお尻に残っている。

「うふふッ❤　不様ですわねぇ❤」

「あはッ❤　あの武蔵にッ❤　お仕置きしてやったわッ❤」

ジンジン❤

ジンジン❤

ヒクッ❤

ヒクッ❤

ポタ

ポタ

武蔵は、はっきりと感じた痛みに怒っているのではない。暁をここまで変貌させてしまった高雄、そしてその背景にいるであろう何某(なにがし)かの存在。そして何より、暁を守ることが出来なかった自分への怒りを強く感じていたのだ。

「……この程度か……もっと、打って来い……!!」

「……何ですって!?」

「これは意外ねぇ❤　イヤだって泣き叫ぶかと思ったら、もっと欲しいだなんて❤　武蔵って案外、被虐嗜好なの？」

「生意気……生意気よッ!!　武蔵のくせにッ!!　もっと痛め付けてやるわッ!!」

空気と肌を裂くような鞭がしなり、柔い肉を傷付ける音が響く。高雄の含み笑いと、興奮した暁の声。ただひたすら、武蔵は耐えていた。決して、痛くないわけではない。

言うなれば、罪滅ぼし。

暁は武蔵のことを想い、その身を差し出したのだ。どういう形で戻って来たにせよ、その責任は武蔵にある。

駆逐艦一隻、守れなかったのだ。

痛みを伴う罰は当然であるし、それが暁の手による所業であったとしても、受け入れるべきことなのだ。

もしも、暁が――その命を散らすようなことがあれば。

沈んでいった怒りを、誰にも向けることなく、果てていたら。少しでも、暁を満足させたかった。思うようにさせてやり、どんな施しも受け入れるつもりだった。

（私は、耐えてみせる……暁、お前が自分を取り戻すまで!!）

武蔵の決心は固い。幾度と無く振り下ろされる鞭に耐え、段々とお尻の感覚が無くなっていくにもかかわらず、まだ気丈に振る舞っている。

だが、武蔵はまだ気付いていなかった。鞭で叩かれる度に、大粒の愛液が滴り落ちていることに――❤

「はぁ……はぁ……ふぅッ!! どう、武蔵❤ こ、これでちょっとは堪えたでしょう❤──ざまぁないわねッ❤❤❤」
武蔵のお尻には、強鞭の痕がくっきりと残っていた。しかし涙のひとつ浮かべることなく、まだ暁を睨んでいる。
「……も、もう止めるんだ、暁……」
震えながらも、武蔵は言う。
「──はぁ!?」
「暁……お前は……!! 第六駆逐隊筆頭、暁型の長女……誰かを、痛めつけて悦ぶようなレディじゃあないはずっ!!」
「……ッ!!」
突然、何かに怯えるように暁はうろたえる。武蔵の言葉に衝き動かされるように顔を歪ませながら、鞭を持った手をわなわなと震わせていた。
「私の……私の思い通りにならない武蔵なんて──ッ!!」
「暁ちゃん、自棄になるのはまだ早いわ❤ せっかく武蔵が悦んでくれているのだから、壊しちゃダメでしょう❤❤❤ ほら、見てご覧なさい、武蔵のマ○コ❤❤❤」

「高雄っ!!　見るな、暁っ!!　見ないでくれ――っ♥♥」

「……ふんッ♥　騙されるところだったわ♥　武蔵♥♥カッコイイこと言ってるつもりでも、マ○コはびしょ濡れ、それに――何？　ケツの穴までヒクヒクさせて♥♥」

折檻の衝撃か、それとも暁に痛め付けられているという背徳的な状況からか。

武蔵の秘部からは抑えが利かないほどに愛液が漏れ落ち、床に溜まりを作ってはメスの匂いを放っていた。お尻の穴も見られ続け、痛みに耐えていたからかキュッと窄められているが、時折呼吸をするようにヒクついては大きく開く。

明らかに、期待している姿だ。これほどの痴態を見せつけられて、黙っていられる高雄と暁ではない。

「んふッ♥　最高にいやらしいわねぇ♥」

「私は今、暁と話してるんだ高雄っ!!」

「そんなこと言って、本当は期待してるんだ……ッ♥♥」

「そうよお暁ちゃん♥　武蔵ったら、本当は早くチ○ポが欲しいくせに、素直になれないオンナのコなのよ♥♥」

「誘ってるんだ、武蔵♥♥だったら――ッ♥♥」

ヒクッ♥

ヒクッ♥

ポタ

ポタ

「たっぷりぶち込んであげるッ❤❤　おっぱいが出るようになる深素の量なんて、比べモノにならないくらいにッ❤❤❤ケ――――ケツ穴にチ○ポ突っ込んであげるッ❤❤❤」

「っ!?　暁っ!!　やめ――――――んぶっ!?」

「うるさいお口には、私のチ○ポを突っ込んであげるわ❤❤大きな武蔵のお口には、私のチ○ポがぴったりですわ❤❤」

武蔵の手に余るお尻を掴み、暁はぬらりと舌を舐める。散々痛め付けた肉体を、これから最上級の形で犯そうというのだから、興奮も頂点を極める。

背丈に似合わないほど隆々と勃起した肉棒をぴたりと武蔵のお尻の穴に近付ければ、拒むどころか穴の方から吸い付くように貪欲に蠢いていた。無論、武蔵の意思など全く無視された、本能だけの反応であっても、暁は挿入の瞬間を想い背筋の震えが止まらない。

さらに、武蔵の言葉を封じるように高雄が眼前を陣取る。並の男のモノとは比較にならないほど巨大な肉棒が近付き、ぬらぬらと光っている。悪臭というよりは甘く芳醇な香りが近付いて来ると、武蔵の思考はいよいよ瓦解し始めた。

「んんッ❤　まだよ、武蔵ッ❤　まだお預けッ❤❤❤暁ちゃん、ケツ穴にチ○ポを突っ込むなら、マ○コには尻尾をぶち込んであげなさいッ❤　きっと悦ぶわよおッ❤」

「んんんっ!?　んんんっ!!」

何とか抵抗の意思を見せようと首を振ろうとするも、高雄の手が強烈に武蔵を抑え付け、くぐもった声しか出せない。

「高雄さんッ❤　一緒にッ❤　一緒にぶち込もうよッ❤❤」

「ええ、いいわよお❤　武蔵、覚悟してくださいね❤　ん❤」

「――――んごっ!?」

「いくよ――――――せえっのおッ❤❤❤」

スチャッ
ズズ
ズズ
「おらッ♥　喰らい……なさぁぁいッ♥♥」
「んんぶぅぅぅぅんんんんっ♥♥♥」
グバァ

「くっはぁぁッ❤ 入ったッ❤ 武蔵の穴に全部入った❤ ケツ穴もマ〇コも、すっごい締め付けて来てッ❤ うはッ❤ こんなところまで鍛えてるのかしらッ❤ ほらほらッ❤」

「んぐッ!? んっぶッ❤ んむッ❤❤」

「お口も、おおッ❤ スゴく吸い付いてッ❤ 全く、とっても淫乱な戦艦ねェッ❤❤❤」

パンッ❤

パンッ❤

オンナとして感じ得る最大限の快楽を、武蔵はかつての仲間から無理矢理に施されている。奥深くまで抉る暁の肉棒、そしてよくうねる尻尾、それに喉奥まで達してなお強張る高雄の怒張。

全ての穴を犯され、武蔵は快感で頭が吹き飛びそうになる。それでもなお耐えられるのは、誇りがあるから――。

だが……メスの穴という穴を抉られ、嬲られ続ける。それも、かつての仲間……変貌した艦娘によって、だ。

胸はジンジンとはち切れんばかりに振られ、また熱い母乳を吹き出しそうになる。股間からは絶えず刺激が送られ、喘ぎ声を出すことさえ許されない。

グプッ❤

グボッ❤

戦艦・武蔵の思考が、ついに深素によって侵され始める……。

（何故だっ❤　何故……こんなに感じるっ❤❤❤　暁に折檻されただけでも、胸を改造されただけでもないっ❤❤これは――これは、私が心の奥底ではこうなることを望んでいたのか……バカなっ❤❤❤　私は……っ❤❤）

否定も何も出来ないまま、武蔵は自分で出せない答えの螺旋に彷徨っていく。ただ与えられるのは圧倒的な性交の快感と、耳を犯す淫らな音。

「淫乱な武蔵❤　そんなに暁ちゃんとのセックスが好き？幻滅致しましたわ❤　この浅ましい姿を、アナタを慕う艦娘たちに見せてやりたいところですわ……いやらしい❤お仕置きされたお尻を振って、深素をぶちまけるおっぱいを振りたくって……変態極まりないですわね、全くッ❤❤」

（違うっ❤　違うんだ……私の身体が……勝手に……❤勝手に求めてしまうんだっ❤❤　勝手に――……？わ、私は……違う……戦艦の、武蔵……武蔵だ……っ❤❤）

武蔵は気付いていない。既に取り込んだ深素に加え、男根の先から先走りのように湧き出る液体にも、濃い深素が含まれているのだ。それを口内、腸内、膣内から粘膜越しに直接摂取するなど、本来ならば発狂するほど危険なこと。

全く異常を見せず、さらに性に貪欲になる武蔵に対して、高雄はさらに言葉で畳み掛ける。洗脳を施すように――❤

「アナタはもう戻れませんわ❤私たちの仲間になるのよ❤仲間……うふふ、違うわッ❤道具、オナホ、僕（しもべ）、奴隷ッ❤❤いやらしい身体を駆使して、どんな敵も凌辱してッ❤❤ド変態の深素兵器になるの❤」

（へ……変態……ド変態❤）

「あはッ❤ 締め付けが――強くなってぇッ❤❤
武蔵ッ❤ どこまで貪欲な変態さんなのッ❤❤❤」

わざとおどけるように、暁は腰を
遣いながら不躾に言い放つ。
顔は見えないが、誰にも見せた
ことのないような、不様な表情を
高雄に見せているに違いない。

実際、締め付けが強くなっているのは本当の話だった。
思い切り搾り上げられるかと思うほどの筋肉はやはり、
武蔵でなければ味わえない逸品だ。メスとしての柔らかさ
だけでなく、戦艦としての力強さも相まって、気を抜けば
すぐに深素を暴発させてしまいそうになる。

「スゴいッ❤ スゴいわよ、武蔵❤❤ 最高のオモチャよ❤
アナタは私のオモチャッ❤❤ ずっと愛してあげるッ❤❤
どんなに醜くなってもッ、私だけはずっと一緒だからね❤」

意思ある艦娘ではなく、あくまで【モノ】として扱う発言。
暁の非道ともとれる言葉に、武蔵は怒るどころか――。

「くぅぅぅぅッ❤ 喉の……口の吸い付きッ❤❤❤
激し過ぎよおッ❤❤ 暁ちゃんの奴隷に相応しいわねッ❤
アナタの仕えるべき主、分かったかしらッ❤❤❤」

高雄の言葉通り、まるで許しを得た犬のように、武蔵は
大きなストロークに舌と唾液、さらには喉をも交えて
肉棒にむしゃぶりつく。

（私は、きっと――……暁たちに従うことが、幸せなんだ❤）

誰からというわけでもなく、三人の動きは激しくなる。性の極み、絶頂へ競うように昇り詰めていく――。

「はあぁぁッ❤ イキそうッ❤ 武蔵の中でチ○ポと尻尾が爆発するぅッ❤❤ 私の深素ザーメン、受け取ってえぇぇぇッ❤❤」

「むごおおおおおッ❤ おッ❤ おッ❤ おおッ❤❤」

「私もイクわッ❤ 武蔵ッ❤ 暁ちゃんも一緒に❤ 全部の穴でイキなさい❤ 皆で一緒にイクのよ❤」

「止めよッ、武蔵❤❤ イクッ❤ イッグぅぅぅッ❤」

パン❤

パンッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

ビクッ

「お゙おおおぁぁぁぁッ♥♥♥」
「ぬ゙っはぁぁぁぁぁぁッ♥♥♥」
「くぅううぅゔうぅぅッ♥♥♥」
ビグッ♥
ビュグッ♥
ビュルルッ♥
ビグッ♥
ビシャ
ビュルッ

激しい絶頂の波が、三人を襲う。武蔵のイキっぷりは当然、余裕があるはずの暁ですら意識がふっ飛びそうであった。

「きッ♥　気持ち良すぎてッ♥♥♥　射精ッ♥　やべッ♥♥　いっぱい出るッ♥♥♥　いっぱい――いいいいいいいッ♥♥♥」

三穴から未だ注がれ続ける深素に、武蔵の意識も誇りも殺ぎ落とされる。根源たる核から真っ黒に塗り潰されていく感覚が、至上の悦びと一緒にもたらされるのだ。既に口から入り込んだ高雄の深素によって思考は潰され、ドス黒い考えと、ひたすらに性を貪る堕落した感情しか浮かんでこない。武蔵の生きる意味が、この絶頂によって変化した瞬間でもあった。

「――ッ♥♥♥　――ッ♥　ごぎゅッ♥　ごく♥　ごぎゅるッ♥♥　ごぐんッ♥♥♥」

高雄の肉棒から吐き出される深素を、一番の好物のように喉を鳴らして飲み干す。能動的に深素を受け入れている。

「うふふッ♥　暁ちゃんもしっかりなさいな♥　これで、武蔵は私たちの仲間――いいえ、道具になったのよッ♥」

最期とも言える瞬間、武蔵の思考にある感情が浮かぶ。絶頂の波に呑まれ、瞬く間に消えてしまったが――。

（すまない……皆……ッ❤　私はもう、抗えない❤
許してくれ……暁……大和ッ❤❤❤❤）

ゴウンゴウンゴウン――――……。

無機質に駆動する機械の音を、武蔵は夢見心地に聞く。
不可思議な液体の中でふわふわと浮かび、口に装着された器具からは絶えず、あのドス黒い物質が注がれ続けている。
流れて来る強制的な快感と共に、胸からは物質が搾取され続け、何かの機関と化したかのような錯覚さえ覚えていた。

常に快感は溢れ続け、もう少しで絶頂しようという瞬間、機械が激しく蠢き意思では抗えない極致へと誘われるのだ。
武蔵はまさに夢見心地のまま、意識もなくただひたすらに性の悦びを刻みつつ、妖しい処置を受けていた――――。

「処置は順調なようね❤　気持ち良さそうに眠って❤❤」

「あっ、高雄さん❤　うん、武蔵ったらすごく大人しいの❤さっきイッたばかりで、質の高い深素が採取出来たのよ❤」

ふたり掛かりで犯したとはいえ、武蔵の処置には長い時間が必要であった。気絶した武蔵を処置槽に漬け込み、肉体の活性と強化を促す深素を送り込む。彼女の身体を通してより強くなった深素を母乳として取り出す処置を、高雄と暁が邪悪な笑みを浮かべながら見守っていた。

「送り込んでる深素は、暁ちゃんのチ〇ポから出たモノ？」

「うんッ❤　私の味を覚えさせて、頭に刻んであげてるの❤武蔵も、身体をビクビクさせて悦んでくれてるわッ❤❤」

嬉々として話す暁は、武蔵を自分の思うがままに造り変えていくことに性的な興奮すら覚えるようで、股間の逸物を固くさせ、処置を見守りながらシゴき始めていた。

「ところで高雄さんは、どうしてここに？　まだしばらく時間が掛かるけど――あッ、もしかして♥♥♥」

「そうよ、ちょっと武蔵の深素を頂くわね♥♥　やっぱり戦艦の力……スゴく甘くて、ヤミツキになっちゃうみたい♥お酒より美味しいって、かなり評判なのよ♥♥」

おもむろに、武蔵の入っている処置槽のパネルを操作し、絞り出した新鮮な深素を器に受け取る。やはり快感を感じるようで、武蔵は無意識のまま身体を震わせていた。

「なぁんだ……セックスしてくれるのかなぁって……♥♥」

「うふふ、私もシたいけど……私は少尉の秘書艦だからね♥また今度、遊びましょう♥　武蔵の処置が終わったら、ね♥」

「はぁい♥　愉しみだね、武蔵ッ♥♥」

暁の言葉に反応するように、武蔵は快感に酔い続ける……。

武蔵が深素処置を受け始めた頃のことだ。

高雄は少尉の命令で、とある艦娘の処分を命じられていた。この艦娘、捕らえたまではよかったのだが、深素との相性が悪いのか適性が無いと判断されたのである。

好きにせよ、とのことだったので高雄は言葉通りにした。決まった時間になると、必ず深素が混じった精液を与え、どうなるか観察することにしたのだ。

最初は床に置かれた受け皿に口すら付けなかった。だが――同じ重巡洋艦である高雄には、彼女が飢えに耐え切れず、生きるために必ず取り込むだろうと分かっていた。するとどうだろう。ひどく反抗的だった彼女とは打って変わって、会う度に少し顔を紅らめて表情が幾分か柔らかくなったのである。あからさまに敵対の意思を表していた頃とは、別人のように愛らしくなっていた。

そして今日もまた、高雄の給餌の時間になった。

搾りたての戦艦深素――一度だけ与えたことがある。極上のウマさだと訴え、また味わいたいと懇願してきた彼女のために、わざわざ搾りたてを持参したのだ。

「――入るわよぉ❤❤」

高雄が甘ったるい声を出して部屋に入ると、特に反応は無い。それまで立っていたのか、振り返りながらサイドテールを揺らし、彼女は真っ直ぐ高雄を見た。

「調子はどう？　那智❤」

「……正常だ。別段、変わったところは無い……」

那智と呼ばれた艦娘もまた、この施設に幽閉されている捕虜なのだが、手枷は無い。営倉内とはいえ、ヒトの持つ力の何倍にも及ぶ重巡洋艦を野放しにするのは、いささか危険と判断出来なくもないが――。

那智は、変わり果てた高雄を見ても特に驚きもしない。全裸でも恥じることなく、武人のような佇まいで凛としているあたり、深素があまり馴染まないという話も頷ける。

「何だ、高雄――何か用か？」

「何か……って❤　決まってるじゃない❤」

コト…♥

「はい、これ❤❤　捕虜の食糧よ❤❤」

コトリと冷たい床に置かれたのは、まるで得体の知れない汚濁だった。時折生きているかのようにぬめり、僅かな光に白く反射するが、あまり美味しそうな外見はしていない。

鎮守府にいた頃のティーカップ、それに酒を注ぐ杯が恋しくなるほどみすぼらしい器に、そのような汚濁がたんまりと澱んでいるのだ。

見るからに粘り気のある外見は、艦娘でなくとも嫌悪感を――。

「他のコに出すと、いらないって飲み干せないのよねぇ❤栄養満点なのに❤　那智はいらないかしら❤❤❤」

「何ッ❤　何ともったいな――いやッ❤　はしたない。捕虜という立場は、生命を保障されているのだから、その施しは受けるべきだ。捕虜たる身に何かあったら、困るのは私たちではなく指揮官……提督だというのに、全く。高雄、他のモノの無礼は詫びる……故に、ここにその余ったという食糧を持って来てはくれまいか？　私が全て呑み干そう」

「那智……好きなの、これ❤」

ドキッ❤

「なッ❤　何を言っている❤　そんなわけがないだろう!!
所詮は捕虜の食糧だッ❤　それを無碍にすると、私たちの
上のモノが困るから、仕方なく――!!」

赤面しながら答える那智を見て、高雄は下卑た笑みを
浮かべる。その後、満足そうに頷いた。

「そう❤　今日のは極上だからね❤　きっと美味しいわよ、
甘くてうんと味が濃いから、よく噛んで味わうこと❤❤」

「分かった……ならば早々に立ち去るがいい。私と貴様は、
今や敵同士だ。一度味わって覚えているあの味を、わざわざ
持ってきてくれたのだな。貴様にも事情があるかもしれん、
あまり――その……えぇぇぃ、もう立ち去れッ❤」

「はいはい❤　分かりましたわ❤　失礼致します❤❤❤」

わざと仰々しく礼をし、部屋を去っていく高雄の背中を
見ながら、那智は小さく息を吐いた。

残されたのは、黒い器だ。

（高雄め……私は辛口が好みなのに、わざと甘く蕩ける
食糧を持って来たな……喰えないヤツだ……ッ❤❤）

「もちゃッ❤　にぢゃッ❤　ねもッ、もほぉッ❤　んちゅ❤ふふふ、んぢゅるッ❤　んぐッ❤❤　ごくッ❤❤　んッ❤んぅぶッ❤　ぶぉッ❤　んじゅじゅッ❤❤　もぉっほッ❤」

何度も、何度も噛む。口いっぱいに拡がるような半固形の食糧は不思議なモノで、噛めば噛むほど味が出る。そうだな、酒の肴といえばスルメだが、あれと似たような印象だ。

全てが同じ触感というわけではない。故に、実に面白い。堅いような部分を歯で噛み砕き、磨り潰すのだ。姉には無論、妹たちには到底見せられないような下品な咀嚼……ッ❤❤あぁ……すまないな、私ひとりで独占してしまって❤

せめて、少しずつ……ダマを削り落として、喉を通る感覚を長く味わうぞ❤　酒の喉ごしにも似た感覚は、軽く酔ったような気分を彷彿とさせ、自然と頬が緩んでしまうな❤❤

「んふぅぅぅッ❤❤　ふんッ❤❤　んふんッ❤❤　ふふ❤うッ、ぷッ❤　くちゃくちゃッ❤❤　ねもッ❤　ぐじゅ❤ねぶッ、ふぅぅッ❤　ふぅぅむッ❤　ぐじゅぢゅッ❤❤」

いかんッ❤　これほど美味い食糧は久しぶりだというのに顔がほころんでッ❤　もったいないッ❤　啜ってでもッ❤啜ってでも大切にするぞッ❤　歯の一本、味蕾の一個まで全てに行き渡らせるッ❤❤　鼻を通って来る香りも、このねばねばとして喉に絡み付くようなクセも、全部イイッ❤酒などと贅沢は言わんッ❤　捕虜としてこのようなモノを食せるのなら……私は一向に構わないッ❤　悦んで捕虜になろうではないか❤　そうだ、他の連中も――――ッ❤

「おおえっぷ♥　この息の吐き返しがたまら――んッ!?
高雄ッ!!　い、い、い……いつからそこにッ!?」
「たった今、入って来たばかりですわ」
まだ残り香のする那智の口から、焦りの声が漏れる。
別段問い詰めるわけでも糾弾するわけでもなく、高雄は
那智の痴態をそれほど気にしてはいないようだった。
「い、今のはだな……その、あまりに食糧が美味すぎて……
そうだ!!　アレは酒の肴でいうとイ、イカに近いなッ!!
はははッ!!　噛めば噛むほど味が出るというヤツでッ!!」
どこか必死になって説明する那智を放っておき、高雄は
床に置かれた器――丹念に舐め取られて一滴も残って
いないのを見て――満足そうに頷いた。
「美味しかったの？　じゃあ、まだ飲めるかしら♥♥♥」

「何だとッ❤　まだあるのかッ❤　ゴクッ❤❤
い――いや、すまない……捕虜という立場でありながら、
いささか不躾であったな……❤」

鎮守府でもそれなりの立場であり、旗艦を務めたこともある那智らしく、一歩手前で踏みとどまる。特に咎めるわけでも、惜しかったとも思うわけでもなく、高雄は言い放った。

「そうですわね❤　今用意出来るのは、先程のモノとはまた違った味になるだろうから、あまり無理に勧めるのも、ね❤」

「何――――違う味❤　何種類かあるのか、アレがッ❤」

興味深々という期待の胸中が窺える反応に、高雄はようやく笑った。元から酒を嗜む那智が、ここまで鼻を鳴らして求め、これまでの立場や誇りを捨てて縋り寄って来そうなのだ。

「味わいたいのね❤　うふふッ❤　当然よね、食糧だもの❤」

「す、すまない……❤」

「構いませんわ❤――私の言う通りにして頂ければ――❤」

「餌を媚びる犬のように❤　そう、その態勢を維持してね❤
舌は思い切り突き出すッ❤　喉の奥までぜえんぶ見せて、
涎をだらだらに溢れさせる……うふふッ❤❤　そうよお、
よく出来ましたッ❤❤❤」

「……か……ぁは……ッ❤」

薄暗い部屋に響くのは、高雄の高圧的な声だけである。
いるはずの那智――もしも正常な状態だったならば、
反論や抵抗のひとつ、出来たかもしれない。だが、今の彼女は
知らずの内に食糧として深素を大量に摂取し、頭の中を
作り変えられていると言っても過言ではない。餌を与える
という高雄の言葉に従うことが、今の那智にとって至上の
悦び、そして欲求を満たすための行為なのだった。

高雄の言葉に従い、さらに那智は浅ましく喉を震わせて何とか声を絞り出す。これがあの誇り高い那智の姿かと思うと、高雄の股間はいきり勃つ。さらに彼女を狂わせる深素を吐き出すべく邪悪に蠢く巨大な陰嚢、そして熱さと硬さを増していく肉幹に満足そうに微笑み、手を添えた。

（歯の裏も喉の奥も丸見えでッ❤❤ 馬鹿な子ねぇッ❤❤ アナタが美味しく食べてる食糧はッ❤❤❤ チ〇ポから出た深素入りの特濃ザーメンなのよッ❤❤❤❤）

「はぁぁぁぁッ❤❤ はぁぁぁぁ……――ッ❤❤」

「うふッ❤ ふぅぅぅッ❤ ふぅッ❤❤ おっふぅッ❤❤」

よく躾された飼い犬のように、ひたすら施しを待つ那智。熱い吐息を剛直に吐きかけられ、高雄は猛然とシゴき始め。差し出された舌に当たるかという位置で固定した。陰茎をシゴく音など那智には聞こえていないのか、じっとしている――が、口の中が咀嚼を覚えているのか、勝手にいやらしく蠢き、高雄の劣情を誘う。既に先走りが飛び、腰と脚の震えが止まらず……あまりにも早い限界が近付く。

「ほぉッ❤❤ 射精(だ)しますわッ❤ 食べなさい、那智ぃッ❤」

「イ――っぐうううううううッ❤❤❤
深素ザーメンぶち撒けるッ❤❤ おおッ❤
たっぷり食べなさいッ❤ まだ出るッ❤」
ビュグッ
ビグッ
「んぐッ❤❤ ごっぉ❤ ごぐッ、ごふッ❤
ごぎゅッ❤❤ ごぎゅッ、ぎゅぽぁッ❤❤
んッ、がぁっぷッ❤❤ おっぷッ、んんッ❤」

「んんっごッ♥　じゅるるるッ♥　じゅぷッ、ぐぽ、おぽッ♥
ごくんッ、ごぎゅッ♥　ごっぎゅッ♥　ぢゅるるるッ♥♥♥
――ぐちゃ、ぐちゃッ♥　ごぐッ、ごぐぅッ、ぷッ♥」

時折引っ掛かる塊を気合いで嚥下し、その白い喉を通る汚濁を胃に収めていく。喉ごしは最悪だろうが、那智にとってはこれが何にも代え難い逸品なのだ。決して零さず、呑み干す。

「はぁッ、はぁ――ッ♥♥　うふふッ、那智ったらお下品♥
鼻から泡が出ていますわッ♥　いやらしいわねぇッ♥♥」

勢い良く呑み過ぎたのか、喉と繋がっている鼻からも吸引し泡が噴き出ている。高雄は嘲笑するが、那智は全身を震わせ懸命に深素を取り込もうとする。性格が出ているのか、この状況でも那智は大真面目に振る舞っているのだった。

「んんんぁぁぁぁぁぁぁぁッ♥♥♥♥　呑んだッ♥♥♥♥とてもッ♥　とても新鮮な食糧だなッ♥　うぷッ、おぼッ♥びちびち胃の中で暴れてるようで――す、すまないッ♥♥おえぇッ♥　でもこの通りッ♥　一滴残らず戴いたぞッ♥美味だったッ♥♥　毎日でも食べたい、至高の逸品だなッ♥酒のように熟成させればどうだろうかッ♥♥　す、全て私に処理させて貰えれば嬉しい限りだッ♥　よろしく頼むッ♥」

味わった証拠を見せつけるように、那智は舌を突き出す。彼女の口内には微塵も深素が残っていない。確かに、全て呑み干したのだろう。内側から凄まじい勢いで浸食されるというのに、彼女はさらに深素を求める。確実に頭の中までヤられているのだろう、しかし変化は現れないのだった。

――（やはり、この子は戦力には……処理係が適任かしら♥）――

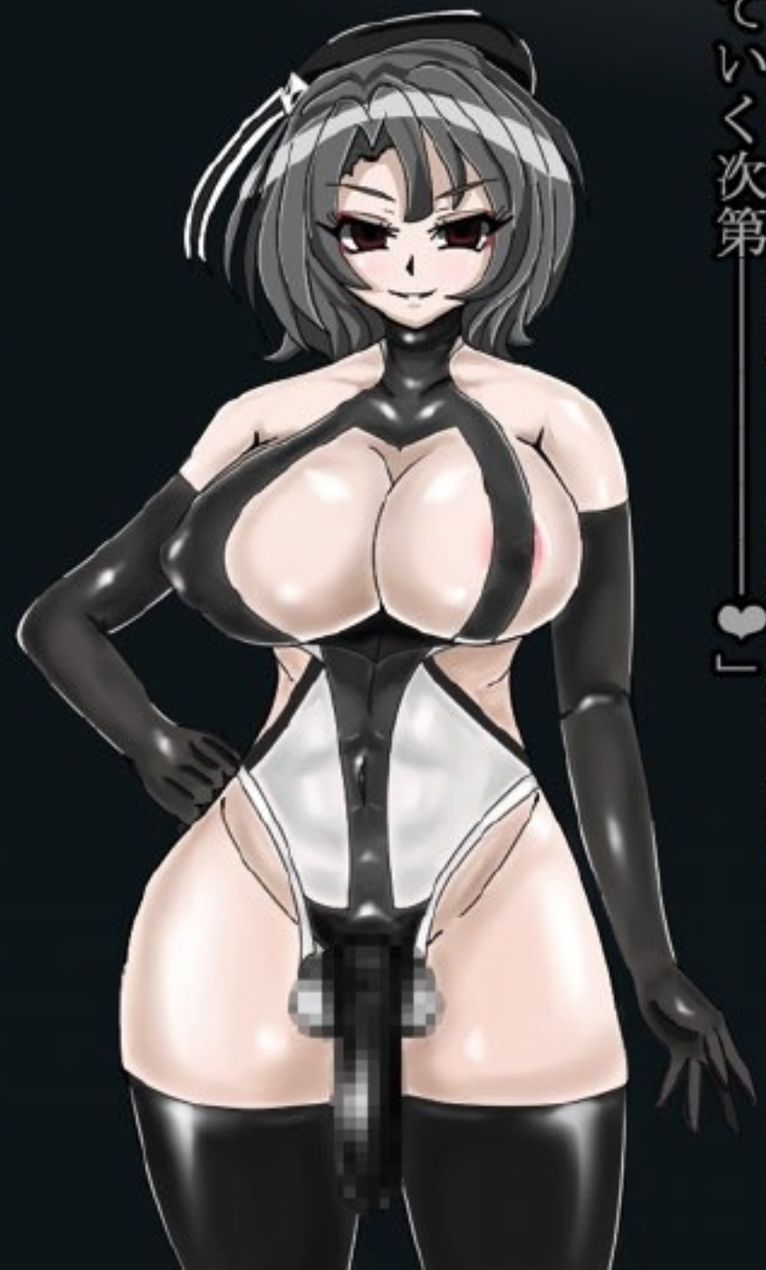
ある時、那智を相手にスッキリする日課を終えた高雄は、秘書艦として少尉の部屋で執務を行っていた。

『――武蔵の処置にはまだ時間が掛かるようだな』

『はッ❤　一両日中には完了すると見込まれますわ❤　暁が付きっきりで管理しています❤　ご心配無く❤』

『戦艦が深素の力を手に入れたらどうなるか、愉しみだ。完了次第、手近な鎮守府を接収するぞ。海底にも愛着はあるが、やはり地上に工廠が欲しい。さらに研究開発を進め、より多くの艦娘を手に入れなければな……!!』

『崇高な目標ですわ、少尉❤　どこまでもお供致します❤　秘書艦であるこの高雄、さらにお力になれるよう、精進していく次第――❤』



少尉は納得したように頷くが、彼は実体の無い精神体だ。高雄はその所作が分かるほど、邪悪な深素に塗(まみ)れているが、少尉としては、いよいよ迫る局面に考えるところがある。

「何かお考えですか、少尉？」

優秀な秘書艦だ、胸中を察して言葉を掛けるなど容易い。

「オレはこの海底施設にいるからこそ、この姿で良かった。だが、これからは肉体が欲しい。強く頑丈な肉体、それにお前のように美しくなければダメだ……そう考えていた」

「あら――でしたら……私が思い浮かべたのが、ひとり❤頑丈ですし、綺麗な姿をしています❤　少尉もきっと、気に入ると思いますわ❤　うふふ……ッ❤」

高雄のことだから、決して少尉にとって悪いようには……しないはずだが、どこか危険な香りが漂って来る。

「どの艦娘か……優秀か？」

「私と同じ重巡洋艦ですわ❤　旗艦を務めたこともある、しっかりモノ――ちょっとお堅いところもありますが、少尉にぴったりの肉体だと思われます❤　艤装を拵えれば前線にも立てますし、彼女に縁のある艦娘を手に入れる時、お役に立つかと――❤」

話だけ聞くと、あまりにウマい話である。しかし、せっかくの秘書艦からの進言だ。

動きやすい肉体を手に入れたいのは事実であったし、断る理由は無い。早速、着手することにした。武蔵の処置が済み次第、すぐに動きたいところでもある。

「……案内しろ」

「はッ、かしこまりましたわ❤　いくらい深素を施しても決して心を折らず、誇りを保ち続ける艦娘の肉体……❤きっとお気に召すと思います❤　さぁ、行きましょう❤」

高雄の先導で、少尉は自室を後にした――。

「ッ!! むッ、高雄ッ!? そ、それに何だ、後ろのは……!?
いや、そんなことより――食糧はどうなっているのだ!?
そ、それよりも……いくら捕虜とはいえ、確認も無しに
入って来るとは、無礼ではないかッ!!」

(高雄、こいつで……那智で大丈夫なのか)

(いくら深素を受け入れてもこの通りです。頑丈なのは
保証致します。仮初(かりそめ)の肉体には最適かと思われますわ❤)

部屋に突然入って来た高雄と少尉に、那智は抗議の意思を
示す。食糧がどうのというのは、腹が減っているわけでは
ないだろう。ただひたすらに、深素を体内に満たしたいだけ。
歪んだ精神すらも、高雄が勧める一因であった。

(分かった、これにしよう)

(かしこまりましたわ❤)

「おい、さっきから何をこそこそと――」

「那智、お座り❤」

「はぁぁぁぁぁッ♥　あぁッ♥　ふッ♥♥♥　ふぅッ♥♥」
（何だ、これは……尻尾があれば振りそうな忠犬っぷりだ）
「調教のたまモノですわ♥　よく出来たわね、那智♥　でも、すこーしお預けよ……出来るわね♥」
「はふッ♥　ふッ♥　ふぅ、うふッ♥」

高雄の言葉に、それまでまだ理知的な表情をしていた那智が一変して――――跪（ひざまず）く。浅ましく舌を突き出し、犬のように餌という施しを待っているのだ。この無防備なこと、少尉は高雄を頼もしく思うと同時に、恐ろしい調教があったのだと察した。彼女を見ると、妖しい笑みを浮かべている。

「少尉、今ですわッ♥　那智の身体を奪ってくださいませ♥」
（うむ、ではそうするとしよう――――ッ!!）

ず、ぶぶぶぶぶぶ――――ッ!!

「んごッ!? ごッ、がふッ❤❤ んぶぁぁッ❤❤❤ んぐッ!? おっぼぁッ❤ んんんんんッ!!」

深素の塊である少尉が、その大きさを変えて那智の中に侵入しようと口から入り込んだ。その瞬間、那智の野太い叫び声が響くも、その暴挙が止まることはなかった。

ッ!? ズズズッ❤ ズリュッ❤

「私たち艦娘は、使われてこそ存在価値があるのよッ❤❤ 那智、これでアナタも立派にお役目を果たせるのですわ❤ さぁ、少尉を受け入れなさいッ❤ 肉体を差し出して、少尉の器として利用されてこそ、アナタは輝けるッ❤❤❤」

高らかに狂言を紡ぐ高雄に鼓舞され、那智はより大きく口を開く。口だけでなく鼻も、耳からも侵入する少尉を拒めるはずもなく、純正なる深素の心地に、那智の意識は薄れた。

（ダ……ダメだ……これ……気持ち、良すぎて……ッ❤❤）

暴れ出しそうなほどの力の奔流が、那智の内側から起こる。既に意識や理性など消し飛んでいて、覚えている【命令】だけ何とか遂行しようと黒い存在を受け入れていく。自分が食べるために、大人しく座るという命令。呑むという行為だけでも、オンナとして最高の快感を覚えているのだ。那智の意識が消えかかる直前、ひと際大きく身体が跳ねた。

（誰か……私を、沈めてくれ……ッ❤　こいつはッ❤❤
こいつは私じゃない――――私じゃ……ッ❤❤❤）

ドクッ♥
ドクッ♥
ピキッ♥
ピキッ♥
『がぁぁぁぁッ♥♥♥』

既に女性らしい喘ぎではなく、ただの本能的な叫びとなった那智の声を心地良さそうに聞いていた高雄が、気付く。絶頂の波が穏やかになりつつある中、那智の肉体に変化が現れ始めたのだ。あざとく見つけると、ニヤリと嗤った。

「はっ♥ へッ♥ へッ♥ えぁッ♥♥ ふぅ、はぁッ、はッ♥」

「あら、もう変化が……♥♥」

凛々しく、睨まれればそれだけで傷付けそうな切れ長の目。飾りっ気は無くとも、美しかった那智の眼に、ねっとりと絡み付くような濃い紫色のアイシャドウが浮かび上がる。内側から染み出しているかのように自然と現れたそれは、肉体を道具として扱い、乗っ取った人物が施した証のようであり――高雄はより、口角を吊り上げるのだった。

「いかかですか、少尉♥ その子の身体は……うふふ♥♥」

「イイ具合だ……悪くない❤　これからは、オレがこの那智の身体を使い尽くしてやろう❤　くくッ、ははッ❤」

――一方の、暁。

彼女はまだ、少尉が那智の肉体を手に入れたとは知らない。既に何日も、この研究室で過ごしている。頬擦りするように、処置槽の中の武蔵と寄り添い、最強の兵器としての目覚めを心待ちにしていたのだ。

そしてついに、その時は訪れる。

「はぁ……ッ❤　はぁ……ぁッ❤　武蔵……武蔵ぃ❤❤　私の武蔵……ようやく、会えるのね……愉しみぃッ❤❤❤」

自分の力で堕とした圧倒的な存在、そしてそれを使役するという未知の快感に苛まれ、暁は身震いを禁じ得ない。

プシュ――――シュウウウウウウウウウ……ッ❤❤

「――ッ❤❤　武蔵ッ❤　その姿――――ッ❤❤❤」

まず、処置槽から妖しげな液体が全て取り除かれた。次に空気の抜ける、大きな音がする。

ゆっくりと、姿を現す武蔵。足取りも息遣いも正常だ。明確な意思を持っている。

「あぁ……素敵ィ❤」

うっとりと、自分の自信作に感嘆の吐息を漏らす。暁が思う【淑女(レディ)】らしからぬ、下心丸出しの声も仕方ない。武蔵は深素を手に入れ――強く、美しく改造されていた。

「――おはようございます、暁様❤」

体躯はそのままに、深素という新しい力を与えられ続けた武蔵――意外にも、第一声は礼儀正しい挨拶だった。

たったそれだけ……その言葉に、暁は軽く達しそうになるも、かろうじて耐える。僕の前で、いきなり射精するわけにはいかない。脚で踏ん張り、奥歯を噛んで微笑む。

「ひッ――んきゅ……ッ❤」

「如何致しましたか？」

言葉のひとつ、所作のひとつも大きな態度を取らない。戦艦の実力に、深素処置を加えた今の武蔵が、まるで暁に傅くように接する――それだけで暁の【淑女】として認められたいという心が満ち、達成感に溢れていくのだ。

「なッ、何でもないわよッ❤　それにしても……武蔵❤今のアナタ、すっごく強そうに見えるわッ❤❤❤」

「はッ❤　ありがたきお言葉にございますッ❤❤」

「はぁ……はぁ……ッ❤　武蔵……武蔵ぃ……ッ❤❤❤
い、今すぐにでもそのおっぱいをちゅうちゅうしたい❤❤」
「かしこまりました、暁様❤　武蔵をご自由にお使い下さい」
暁の言葉を疑いも断りもせず、武蔵は産まれ変わった肉体を見せつけるように差し出し、己が主の命を果たそうとする。
「そ、それじゃ早速――――って、ダメよッ❤　ダメッ❤」
「暁様……？　かしこまりました……」
何かに気付いたように、暁はブンブンと頭を振って制する。
もう少しで肉体が触れ合うという距離を離れてしまい、武蔵は少しだけ眉を動かしたが、すぐに無表情になる。
「こういう時ッ、【淑女】は独占しないモノなのッ❤❤❤
まずは少尉に報告、それに高雄さんにもッ❤❤」
「はッ❤　暁様の命令通りに致しますッ❤」
暁は興奮を抑え、武蔵に命令する。
そう、まずは報告だ。
愉しむのは、その後。
「行くわよ、武蔵ッ❤」
「はッ❤　かしこまりました❤」
遥かに身体の大きな武蔵が、暁に追従して処置室を出る。
心強い味方を得て、暁は自分が大きくなった気がしていた。

慣れた足取りで暁は施設内を歩み、武蔵はそれに続く。
「深素を与えてくださった少尉、並びに暁様は私の主も同然。一度お会いして、心からの忠誠を宣言致します❤」
「そうよッ❤　私は武蔵のご主人様なんだからねッ❤❤❤あれ……でもオンナなのにご主人様ってヘンかも……？」
「私の主は暁様ッ❤　そして暁様に連なる全てのお方が、私の主でございますッ❤❤　この武蔵、守るための盾であり買くための槍として、いつでもお使いくださいッ❤❤❤」
「そ――そうよッ❤　これから先、ずっと一緒なんだから❤」
顔を紅らめながら歩く暁が、大きな扉の前で止まる。少尉の部屋には、おそらく高雄もいることだろう。武蔵のお披露目を愉しみにしているはずだ。すぐに鋭い瞳に戻る。
「こほん――――んッ」
軽く咳払いし重い扉を叩くと、暁の聞き慣れない声がした。
「来たか……――――入れ❤」
（えッ……？　誰、今の声……？）
「どうぞ、暁ちゃん❤　それに武蔵も、お待ちしてましたわ❤その圧倒的な力、私たちに見せてもらえるかしら❤❤❤」
高雄の声を確認してから、暁は武蔵と視線を交える。恐れることはないと小さく頷かれ、暁は意を決して扉を開け放つ――――。

ギイイイイ

部屋の中にいたのは、秘書艦である高雄と……もうひとり。
暁がこの部屋で見たことが無い、艦娘の姿だった。

『……ん、あれ？　少尉、いないの……？』

『ようこそ、暁ちゃん❤　武蔵の改修は無事に済んだのね❤
うふふ、立派な姿――惚れ惚れするほどの力強さですわ❤』

『ありがとうございます、高雄様❤　そして、初めまして❤
我らが少尉❤』

『ええぇッ!?　しょ、少尉なの……ッ!?　どうしてッ!?』

『お前の中に溢れる深素が、教えてくれたか――武蔵❤
初めましてだな、暁も❤　この身体で会うのは初めてか❤』

高雄の後ろにいる艦娘が、ねっとりとした口調で話す。
暁は理解出来ず、その陰と武蔵、それに高雄に目を配った。
すると高雄は軽く頷くと、微笑んでみせる。

『そんなに混乱することじゃないわ、暁ちゃん❤　少尉は
より好(よ)い肉体を手に入れただけのこと……さぁ、少尉❤』

『そうだ――オレはこの艦娘の肉体を利用している❤❤
これからのために、頑丈でいて美しい身体が欲しかった❤
見せてやろう……これがオレの新しい姿だ――❤』

「重巡洋艦、妙高型二番艦【那智】――ッ❤❤❤
いい身体だろう……強く、美しい肉体だ❤❤❤
深素を手に入れた諸君、よろしく頼むぞ❤❤❤」

那智と名乗った艦娘は――声色こそ那智ではあるが、
静かに……そして含み聞かせるように言い放った。

夜を踊るような衣装に身を包み、肌の露出が眩しい。
目元、唇、そして指先に彩られた紫色は、かつての那智とは
程遠い印象を持たせる。佇む姿にすら深素の片鱗が漂い、
オンナとしての香りに乗せて周囲を誘惑して止まない。
事実、高雄は既にうっとりとして瞳を潤ませていた。

「な、那智さん……うん、確かに……少尉を、感じる……❤❤
少尉、新しい身体……おめでとうございます！」

暁もまた、納得したように吐息を熱くさせる。
従うべき主が肉体を手に入れ、妖艶に振る舞っている、
それだけで自分自身の悦びのように感じてしまうのだ。

「可愛いヤツだ、暁❤　可愛がってやるぞ、後で、な……❤」

「はッ、はい――――ッ❤」

背筋からゾクゾクするような感覚を暁に覚えさせつつ、
那智となった少尉が妖しく嗤う。

「さて――――お前も自己紹介だな、武蔵❤❤❤」

暁の背後に佇み、微動だにしなかった武蔵が一歩、出る。
それだけで威圧感が凄まじいが、この部屋にいるモノには頼もしい味方だと、それぞれ有する深素が教えてくれる。
誰も怖がらずに、変わり果てた姿の武蔵を歓迎した。

「この通り、武蔵には私が処置を施して完成しましたッ❤❤身も心も深素に染まって――私の……私たちの命令に従う兵器に改修しましたッ❤❤❤」

「見事だな、暁❤　よくやった❤」

「素晴らしい姿ね❤」

「はッ、はいッ❤❤ありがとございますッ❤」

「オレたちに褒められて嬉しいか、暁❤」

「……はッ、はいいい……ッ❤」

「可愛いわねぇ❤　うふふ❤」

【淑女】としての初仕事を称賛され、暁は今にも飛び跳ねて悦んでしまいそうだったが、かろうじて堪える。これからは武蔵を僕（しもべ）として扱う自覚が芽生え、甘えるのはふたりだけの時と決めているのだ。まるでモノとしか見られていないが、武蔵はじっと言葉を聞いている。服従する心が現れているのか、主となる存在たちの悦びすら共感していた。

「兵器の価値は当然だが、極上の深素が搾り取れそうだな❤その身体、存分に我々のために奉仕しろ――武蔵❤❤」

「私も味わってみたいですわぁ……ぜひご一緒に❤❤」

「も、もちろんですッ❤❤　ねッ、武蔵――――ッ❤❤」

暁に促され、武蔵は静かに言葉を紡いだ。

「――――はッ❤　お初にお目にかかります❤」

「元戦艦・大和型二番艦――――武蔵ッ❤❤❤身体中から溢れる力、深素を与えて頂き、皆様に感謝の念を覚えずにはいられませんッ❤❤❤」

巨躯に取り付けられた深艤装が、武蔵をさらに大きく見せ、兵器として完成された姿をこれでもかと誇示している。大きく張り出した胸、その乳首には黒い輪が取り付けられ、戦うためだけではなく、深素を生成する肉体としても利用し尽くされているのだった。

「私の命は、皆様のためにありますッ❤　敵を撃ち払い、圧倒的な力で鹵獲し、あらゆる艦娘を捧げましょうッ❤❤」

改修される前から驚異的だった武蔵に、命すらも惜しくないという精神が深素によって刻まれている――その身も、高貴な心も、守るはずだった他の艦娘でさえも、全てを利用し【ご主人様】のために尽くす――――恐怖の究極兵器。

それが今の武蔵であり、少尉たちが求めた姿であった。

「強力無比……我が戦力として頼もしい限りだな、武蔵❤」
「さらに、私と繋がることで武蔵はさらなる力を発揮するようになっていますッ❤❤」
「ほう……❤」
武蔵の背負っている艤装は深素により造られた【深艤装】、従来の艤装と比べ破壊力・耐久力が上回っているという。さらに、使用者の意思を読み取り、意識を向けただけで手足のように扱うことが出来ると、暁は説明した。
「私が武蔵の背中に乗って、おマ○コの中に尻尾を挿れてあげるのッ❤　戦いながらイカせてあげるんだからッ❤❤」
「本当か、武蔵？　お前は戦闘中にイクほどの淫乱か？」
「はッ❤　お言葉通りです❤　私は戦闘行動、作戦中にでも暁様のお赦しさえあれば❤」
暁の言う通り、武蔵の股間部、暗がりになっている部分に大きめの穴が穿ってある。
性の主導権すら握られているというのに、武蔵は嬉々として告白し、少尉たちに全てをさらけ出すのだった。
「イクのもいいけど、ここでは物騒だから――」
「はッ、高雄様❤　すぐに格納致しますッ❤❤」
ズッ　バッ

「んッ……ふぅ❤　完了です❤」
「便利なモノだ❤　高雄、この艤装を増産出来るか？」
「はい❤　整えております❤」
既に暁と武蔵によって、深素の艤装化は確立されている。本来ではあり得ない法外な火力も、意思を奪うような凶悪な装着型艤装も、決して夢ではない話であると高雄が話すと、満足そうに少尉は微笑んだ。
「そうなると、より多くの深素が必要だな❤　深海棲艦から核を奪うのも当然だが――より上質な深素のため、さらに艦種を整えるのも重要な任務だ……諸君ッ❤❤❤」
その言葉を待っていたと云わんばかりに、暁と武蔵は嗤う。歪みきった精神に、少尉の言葉がぞわりぞわりと浸透した。
「はいッ❤　私と武蔵で、たくさん鹵獲してきますッ❤❤」
「この力、少尉殿のために❤❤前線はお任せくださいッ❤❤」
力強く宣言したふたりは、全身を駆け巡る悪しき力に酔い痴れる。今すぐにでも海上へ飛び出し、泊地までも襲撃するような暴性を秘めている。このふたりなら、全てを壊しかねない。
「少尉、我々の初陣となります❤　私たちも参りましょう❤」

大将格である那智――少尉を参陣させる高雄の提案に、嫌な顔どころか、少尉は満面の笑顔で快諾した。

「ふむ、よかろう❤」

「少尉、ぜひ海上の風を味わってくださいませ❤」

首に巻いた小さな発信機を押すと、深素に侵されたモノの頭の中に、少尉の声が直接――鮮麗に響き渡る。

『この通信機は、お前たちの感覚に直接働きかけるモノだ❤オレの命令通りに動き、指示を仰げ❤勝手に沈むなよ❤』

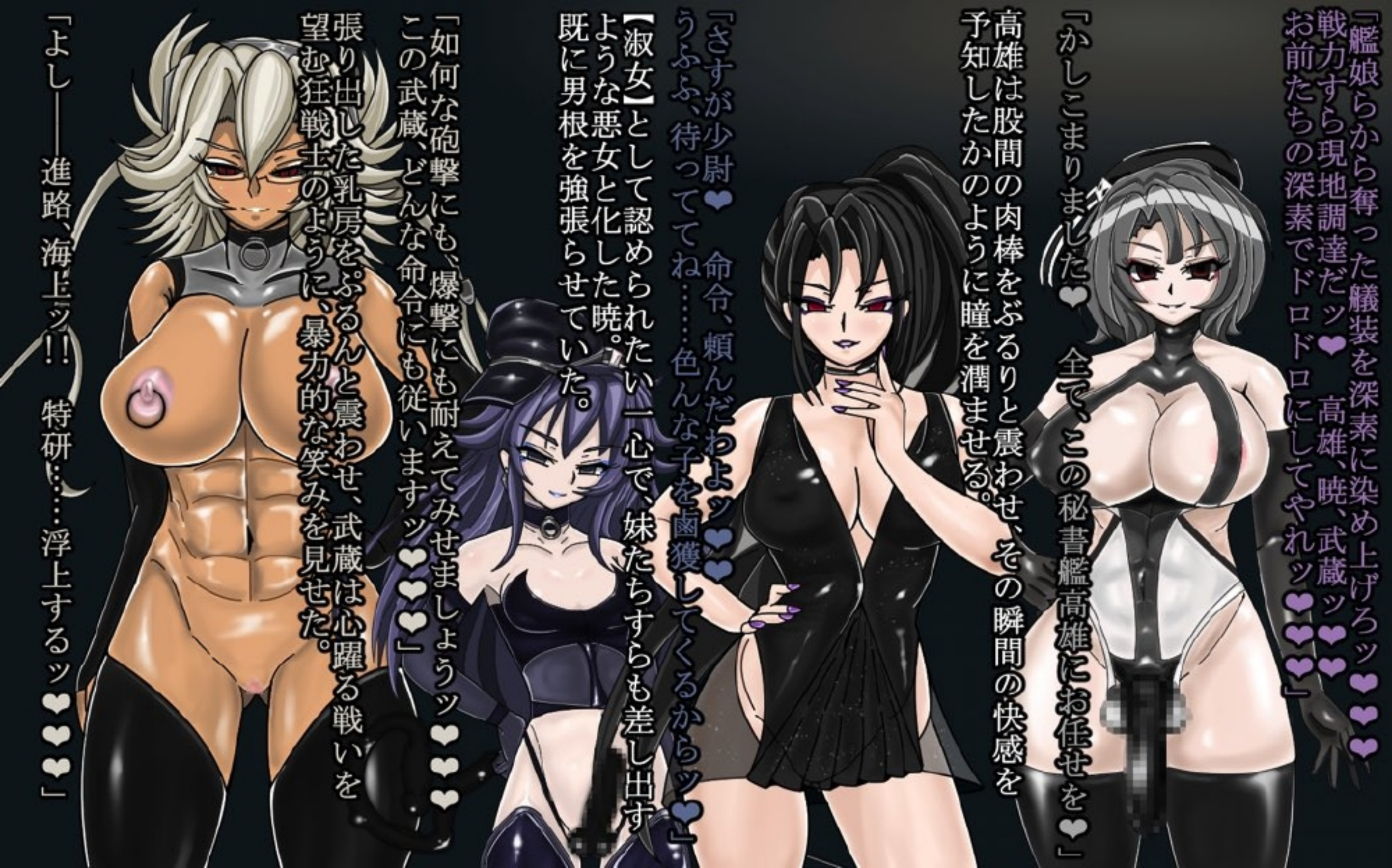
那智の肉体を乗っ取り、その力を全て奪い取っている少尉。細い指をうっとりと動かしつつ、まだ見ぬ戦いへの高揚を抑え切れず、自らも深艤装を装備し前線へ踊り出ん勢いだ。元々の魂――那智の武人肌、そして戦闘へと臨む精神がそのまま少尉のモノになっているように、自然に振る舞う。

「高雄、オレも出るぞ❤　お前も来るだろうッ❤❤」

「はッ、参列させて頂きますッ❤❤」

そして、秘書艦である高雄もまた戦列への参加を宣言する。重巡洋艦である彼女の火力が深艤装によって、どれほど威力を増しているかも、自ら試し撃ちしたいと願っている。

「前方は武蔵、暁❤　後方指示はオレと高雄が行うッ❤❤」


「艦娘らから奪った艤装を深素に染め上げろッ❤❤❤
戦力すら現地調達だッ❤ 高雄、暁、武蔵ッ❤❤❤
お前たちの深素でドロドロにしてやれッ❤❤❤」
「かしこまりました❤ 全て、この秘書艦高雄にお任せを❤」
高雄は股間の肉棒をぶるりと震わせ、その瞬間の快感を
予知したかのように瞳を潤ませる。
「さすが少尉❤ 命令、頼んだわよッ❤❤
うふふ、待っててね……色んな子を鹵獲してくるからッ❤」
【淑女】として認められたい一心で、妹たちすらも差し出す
ような悪女と化した暁。
既に男根を強張らせていた。
「如何な砲撃にも、爆撃にも耐えてみせましょうッ❤❤❤
この武蔵、どんな命令にも従いますッ❤❤❤」
張り出した乳房をぶるんと震わせ、武蔵は心躍る戦いを
望む狂戦士のように、暴力的な笑みを見せた。
「よし――進路、海上ッ!! 特研!……浮上するッ❤❤❤」

『――出撃だッ!!』
『『はッ❤❤❤❤』』

終

◆あとがき

この度は【堕深漸染-深素改修完了セリ-】をご購入いただき、ありがとうございました。
初めて艦○れに興味を持った時は随分前のことですがこの度、形にしてみました。

今回は重巡洋艦、駆逐艦、戦艦を題材に悪堕ちモノとなる作品を作ってみたつもりです。
他にも軽空母、空母、高速戦艦、潜水艦、外国艦など、手を付けたい艦娘は数多おります。
しかし全てに手を出すと、収拾がつかなくなってしまうので……ここで一旦終了。
特に頑張ったのは立ち絵、そして文章です。色々やってみました。

艦○れ自体、深海棲艦化という悪堕ちにぴったりな題材があります。
悪堕ちのシチュエーション、基本絵・立ち絵・総枚数など、かなり挑戦した作品でした。

ご満足頂けたら幸いです。

※18歳未満の購入閲覧　及び
インターネット上への無断転載を禁じます。

サークル名：プルート
製作者：不動心
連絡先：pixivID 【3767622】
Twitter @hudo_shin

※この先はネタバレにご注意ください。
まずは本編を読み終わってから、おまけを愉しんでください。
（通常状態、悪堕ち状態のキャラクター図鑑です）

艦名：高雄
艦種：重巡洋艦
艦級：高雄型1番艦

◆ある遠征任務の最中、艦が突然消えてしまうという海域に入ってしまう。艤装は解かれているが、大破しているというワケではない。不穏な空気も構わず行動出来るあたり、かなり積極的な艦娘なのだろうか。

◇妹たち、そして鎮守府の艦娘たちをまとめるお姉さんでもある。他の子が傷付くならば、自分の身を差し出せる心優しい艦娘。大きな胸とお尻、スタイルの好さは発展途上艦娘の憧れ。妹の愛宕も同じような背格好だが、生真面目な性格からかよく注意する側に回ってしまう。

☆戦闘行動も至って真面目。ただし、それはほんの一面である。作戦が始まると、さすがは1番艦。命令を忠実に遂行する一方で納得出来ない時は、通信で躊躇せず問い質すことも。被害を出さない一心なのだろう、彼女なりの優しさが表れている。

推測　T-163　B-90 W-61 H-92（グラマラスボディ）

艦名：高雄・深
艦種：重巡洋艦（深素改修済み）
艦級：特研秘書艦

◆深海棲艦から奪った核を元に造った【深素】を処置した高雄。
股間に生えた男性器が改修の証となっている。
身体全体を、自ら吐き出した深素によって侵され続け、誕生した。
性格は生真面目から歪みきり、自分の持つ力を【少尉】のために
使うことを誇りとして、どんな搦め手もいとわない残忍な性格。

◇秘書艦として尽くすのはもちろん、参謀的な立場でもある。
第一に考えるのは少尉、そして所属組織である特研のこと。
頭の中に渦巻く淫らな思考、はしたないほど感じてしまう
肉体を想像させないほど、冷静に振る舞える鋼の精神も。
元の姿の生真面目な性格が幸いし、今日も高雄は考えている。

☆重巡洋艦ならではの火力、装甲を兼ね備えた万能型。
さらに深素改修では【深素弾】を発射可能になった。
相対した艦娘に浴びせると簡易的な深素処置が始まり、
容易に鹵獲、撃破が可能になる。特研艦隊の中枢ともいえる。

推測　T-164　B-96 W-64 H-97（深素処置による改修）
※男性器状深素生成機関あり、玉付き

艦名：暁
艦種：駆逐艦
艦級：暁型1番艦

◆遠征任務から帰還中、タコかイカの足のようなモノに脚を取られ、
突然海に引きずり込まれてしまう。海中で大破させられ、衣服を
剥ぎ取られた上に両手を縛られた状態で目が覚めた。
同じ営倉に入れられている戦艦・武蔵と脱出を試みるが……。

◇【淑女】として振る舞うが、それは背伸びした少女。他の駆逐艦と
何ら変わりない容姿だが、心構えは一人前だ。
鎮守府では高雄や愛宕のような素敵な女性に憧れており、日夜
追い付けるように努力している……つもり。
最近、ちょっぴり胸が膨らんでいる。毎日揉んでいる甲斐があった。

☆戦闘経験は浅いが、艦娘として成長出来る素養を持っている。
それは即ち、性への探求心にも似た向上心。
幼いがゆえに快感に溺れ、気に入らないモノはとことん拒否。
淑女とはこうあるべきだという姿勢を見せられると、弱い。

推測　T-139　B-68 W-52 H-66（まだまだこれからボディ）

艦名：暁・深
艦種：操導艦（深素改修済み、特殊仕様）
艦級：特研所属強襲艦

◆憧れの高雄に処女を奪われた上、大量の深素を注ぎ込まれた姿。
身体の内側から急速に浸透し、処置はあっという間に終わっている。
背伸びしていた頃とは違い、生え揃えた肉棒と尻尾で快感を叩き込み、
深素を求める奴隷のような存在に変えてしまうことこそ、
本当の【淑女】だと信じて止まない。

◇元来の素養と深素が噛み合い、嗜虐的な考え方へと変貌している。
だが、少尉や高雄に褒められると素直に嬉しいのか、悦ぶ。
手に持った鞭や尻尾でいたぶるのが大好き。

☆特筆すべきは、やはり【操導艦】という艦種だろう。
文字通り、他の艦娘を操り、泊地や施設まで誘導出来る、
特殊な性質を持っている。肉棒、尻尾、鞭に至るまで
高純度の深素で構成されており、これらに触れたが最期、
暁の従順な下僕となるよう思考が毒されてしまう。
単体でもかなり厄介な相手だが、暁さえ抑えれば
安全かと思うかもしれない。だが、後述の武蔵との
相乗効果を考えれば、彼女こそ最も危険なのだろう。

推測　T-140　B-70 W-53 H-69（伸びしろボディ）
※男性器状深素生成機関玉付き、操導尾あり

艦名：武蔵
艦種：戦艦
艦級：大和型2番艦

◆不穏な空気を海上で察知した武蔵は、他の艦娘に逃げるよう指示をした。やはりイカかタコの足のようなモノに絡まれ、気が付くと全裸で営倉の中にいた。一緒に捕まっている暁を何とか逃がそうとするが……。

◇全艦の中でもトップクラスの圧倒的な肉体。鍛えた身体はあらゆる艦娘の憧れであり、話すことさえ誉れとなる。
常に考えているのは所属する鎮守府の平和。
好戦的かと思われているが、武蔵は心の底から穏やか。
しかし、許されない狼藉を見た時は激しく怒る。

☆敵を撃つ火力、攻撃から身を守る装甲は唯一無二。
戦艦として身も心も鍛えているからか、性的な暴挙をされても動じず、眼鏡の奥の鋭い瞳で睨み付ける。
ただしそれは、彼女が心を許さない場合の話。
心を許したモノの前では、武蔵もオンナなのだ……。

推測　T-178　B-98 W-65 H-96（パーフェクトボディ）

艦名：武蔵・深
艦種：特殊戦艦
艦級：特研所属強襲艦

◆高雄と暁によって深素を注ぎ込まれた上、
戦艦特有の長い改修時間を以てして生まれた、
最強の特殊戦艦。艤装も巨大だが、風貌も異質。
見るモノを圧倒し、戦意を喪失させる戦神。

◇瞳の色が変わるほどに深素処置を施され、
絶対に元の武蔵に戻ることは無い。
従順な性格は機械のようだが、命令以上に
しつこく攻め、必要とあらば自慢の装甲で
他の艦を守る。心躍る敵ほど、堕としたくなる性格。

☆背負った【深艤装】はこれでもほんの一部である。
筒のような部位からは鎖が射出し、強引に複数の
艦娘を鹵獲する。出撃時には暁が背中に乗り、
武蔵は四つん這いになって海上を駆ける。
暁の尻尾を性器か肛門に入れることにより、
武蔵は比類無き究極の兵器と化すのだ。

推測　T-181　B-108 W-62 H-99（ドスケベ戦艦ボディ）
※深素処置により、胸部から深素捻出可能

艦名：那智
艦種：重巡洋艦
艦級：妙高型2番艦

◆遠征地にて碇泊中、突如として海中に引きずり込まれる。
大破以上のことをされたかと考えるほど、何も身に着けて
いない状況でも、冷静にじっとしている。旗艦を務めただけの
ことはあるようで、捕虜という立場を理解しているのか
生まれ変わった高雄の姿を見ても動揺しない。
ひどいことをされない限り、無用な詮索は避けるのが捕虜。

◇お酒が好きで、気分が高揚すると一杯呑みたくなる。
が、捕虜という立場上、酒も食糧も要求は出来ない。
戦うことも出来ない限り、出された食事をただ食べるしか
ないのだが……彼女の場合は違ったようだ。

☆重巡洋艦の性能としては、高雄と同格。実線経験も豊富だが、
深素の適性が彼女にはあまり浸透していかないようだ。
それだけ丈夫ということか、それとも特殊な艦なのか……。
しかし、丈夫な肉体というだけで利用価値があった。

推測　T-160　B-88 W-58 H-86（悩まし重巡ボディ）

艦名：那智（少尉）
艦種：重巡洋艦（深素改修により極限強化）
艦級：特研旗艦

◆深素を司る特研の少尉が、那智の肉体を乗っ取った姿。
丈夫であるがゆえに、地上侵攻への憑代として選ばれた。
身体や手の細さ、足を着いて歩くことの違和感と軽やかな快感、
肉体同士で触れる高雄たちの温かみなどを、存分に満喫している。

◇少尉が乗っ取っているので自らを「オレ」と呼び、自信たっぷり。
既に那智の自意識は無く、戦闘経験なども全て少尉のモノに。
少尉自身が深素の塊なので、深素処置をせずとも能力が限界まで
引き上げられ、常に最適の対応が出来るまで強化されている。

☆艤装こそ那智のモノだが、その扱い方は圧巻。
妖しい衣装を振り乱しながら戦うサマは、まるで夜の女王。
さらに装填されている弾薬を【深素弾】に換装すれば、
狙った艦娘を自軍の戦力に出来るほど活躍出来る。

無論、今の身体にも満足しているが、より理想の肉体を
探して乗り換えるのもまんざらではないらしい。
彼にとって、艦娘はあくまでも道具に過ぎないのだ。

推測　T-162　B-91 W-60 H-90（妖艶クィーンボディ）
※オンナモノに疎い少尉に代わって、秘書艦の高雄が衣装を用意している。